

地下デュエル場にいる
メスガキデュエリスト
の話

カイナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プロデュエリスト。それはデュエルによつて栄光と名誉を勝ち取るデュエル界の花形ともいえようデュエリストにとつて憧れの光の世界。

しかし光があれば陰があるのもまた道理。

光の世界で生きられないデュエリストがデュエルによつて生き延びていく陰の世界。それが地下デュエル。

これはその世界で生きている一人の女の子の話。

「きやつは♡ おにーさんつてば、借金作った上に借金返済賭けた大勝負でこんな女の子に負けちゃうなんてはつずかしー♡ ギーこぎーこ♡ もう生きてる価値ないん

「じゃなーい？ 黙って借金のカタにさっさと死んじゃえ♡」
もつとも、その子がまともであるとは誰も言わないのだが。

目次

ギャンブル系メスガキデュエリストの話

1

特殊勝利系メスガキデュエリストの話

28

強欲デュエリストに負けちやうメスガキ

デュエリストの話

60

ギャンブル系メスガキデュエリストの話

逃げ場のない牢屋の中、まるでコロシアムのように金網で囲まれているその中で一人の20代半ばから後半くらいだろう、ニット帽とベストを着用したワイルドな風貌をした青年が目を血走らせて、目の前に立つ中学生くらいのも、黒いパーカーを着ていてフードを被り、そのフードにネコミミがついていることからまるで黒猫を思わせるような猫目の少女を睨みつけていた。

それに対して猫目の少女はその睨みの威圧を受け流すようなニヤニヤ笑いを浮かべている。

「悪く思うなや嬢ちゃん。お前に勝てばワイの借金はチャラになるんや……」

「んっふっふっ♪ 楽しもーねー♪」

青年の言葉に少女はゆらゆらと揺れながら余裕綽々な様子で笑いながら答える。その様子に青年がチツと舌打ちを叩いた。

「さあ、本日のメインイベントオ！ デスマッチデュエルを開催するぜえ！」

スピーカーからそんな実況が聞こえ、牢獄コロシアムの外でまるで見世物のように二人を見物してワインや軽食を嗜んでいる仮面をつけた男女が牢屋を見る。

「赤コーナー。若いなれどデュエルセンスは超逸品のラツキーガール。ヘルキヤット彩葉！」

「応援よろしくお願いしまーす♡」

紹介を受けた少女——彩葉が観客に媚びを売るように手を振って挨拶、彼女のファンなのか知らないが観客の一部が「おおおおおつ！」と盛り上がる。

「いいぞー彩葉ちゃん！」

「君にまた大金を賭けたんだー！」

「また面白いデュエルを見せてくれー！」

黄色い声を上げる観客に青年が忌々しそうな舌打ちを叩き、実況が続いて青コーナー、と口にした瞬間彼の声が響く。

「紹介なんぞどうでもええわ！ とつととデュエル始めんかい！ ワイはこんなクソガキとつとと倒して借金チャラにしたいんや!!」

「……えー、ではまあ。省略いたしましょう」

青年の怒号に実況は彼の紹介を省略。

「あつははははは！」

「いいぞーチャレンジャーー！」

「大穴でお前に賭けたんだー！ 勝ってくれよー！」

彩葉に対する声援に比べると嘲るような笑い声が混じった応援に青年がイライラしたように歯ぎしり。そう思っていると突然牢屋に入ってきたグラサン黒服のいかにも男達、青年の両腕や首に何かの装置を嵌め始めた。

「お、おい、なんやこれ!？」

「衝撃増幅装置。僅かなダメージでも全身に苦痛が走ります」

「なんやて!?! そんなもん聞いてらんぞ!?!」

シルクハットにコート姿な瘦躯の男性の言葉に青年が声を上げるがお構いなし。「これが地下デュエル」と締めくくるのみだった。

「ちいつ! まあええわい。約束通り、このクソガキを倒せばワイの借金チャラにしてくれるんやろうなあ?」

「お約束いたします」

青年の言葉に瘦躯の言葉はそう返すのみ。青年は良かったらいいと言いたげな様子で、慣れたように件の衝撃増幅装置を装着した彩葉を再び血走った目で睨みつけた。彩葉もニヤニヤ笑いをしながら青年を見て、二人はデュエルディスクを構える。

「デュエル!!!」

「イツツア、ショータータイム!!!」

そして二人の掛け声とデスマッチデュエルなる地下デュエルの開始を宣言する実況

の声が重なり合った。

「先攻は私だよ、ドロー」

先攻を取ったのは彩葉。彼女はカードをドローすると手札を取る。

「私は「一撃必殺侍」を召喚して、カードを五枚セットしてターンエンドだよ」

一撃必殺侍 攻撃力：1200

「はあ!? いきなり手札全て使うやと!? 嬢ちゃんデュエルの定石知らんのか? まあ

ええわ、ワイのターン。ドロー!」

青年は彩葉のプレイングに呆けた声を出しつつ、だがそんな雑魚相手ならさっさと勝って借金チャラにしようと思ったのか深くツツコまずにドロー……その瞬間、彩葉がニヤリと笑った。

「おにーさん、手札今何枚?」

「はあ? 六枚に決まっとるやろうが?」

彩葉の言葉に青年がまた呆けた声を出す。後攻ワンターン目、手札は初期の五枚のまま、そこに一枚ドローしたから合計六枚。わざわざ計算するまでもない程単純な足し算だ。

「そっかー六枚かー。私の手札はゼロ枚なんだー」

「お、おう……」

「だから……これを発動するね?」

ニヤニヤ笑いの彩葉の場の伏せカードが一枚、翻る。

「トラップカード「ギャンブル」! このカードは相手の手札が六枚以上、自分の手札が二枚以下の場合に発動する事ができる。コイントスを一回行つて裏表を当て、当たった場合、自分の手札が五枚になるようにデッキからカードをドロウする。ハズレの場合、次の自分のターンをスキップする」

「なあ!? ワンターン目からギャンブルカードやと!」

彩葉の大胆なプレイングに青年が騒然としていると、フィールドの中央に巨大なコインのソリッドビジョンが出現。表を示す目玉が一つある向きと裏を示す無地の向きが交互にくるくると回転して表示される。

「表」

彩葉が自分の出目を宣言し、指をパチンと鳴らすと同時にコインが弾かれたように上空に飛ぶ。そして落ちてきたコインは彼女の宣言通り表向きを示していた。

「ギャンブルせいこー♪ ギャンブルの効果により手札が五枚になるように、五枚のカードをドロウするね♡」

「ちいつ! やけどそれがどうした! ワイは手札から——」

「あ、待つておにーさん。メインフェイズに入る前に、スタンバイフェイズにこのカードを発動するね」

「——なんやまだあるんかい!?!」

青年は彩葉が一気に五枚もカードをドロワーしてきたが、そんな事で流れを取られるものかと動き出す。が、腰を折るように彩葉が再びカードを発動する。

「永続罫、「死神の巡遊」を発動。相手ターンのスタンバイフェイズ時にコイントスを一回行つて、表なら相手はエンドフェイズ時まで召喚・反転召喚する事ができず、裏なら私は次の自分のターン召喚・反転召喚する事ができない」

「チツ、またギャンブルカードかい……」

再びフィールドの中央にコインのソリッドビジョンが出現。今度は出目を当てるのではなく出目によつて決まる効果のためか彩葉は何も言わずに指パツチン。またもコインが上空へと飛んだ。そしてそのコインの出目が決まった途端、彩葉の場の死神の巡遊のカードから黒い霧が吹きだし始める。

「く、くそっ!?!」

「あは♡ ラッキー♪ 表が出たことでこのターン、おにーさんは召喚・反転召喚出来ないよ♪」

青年の表情が歪んだことから分かるように出目は表。青年のフィールドを黒い霧

が覆うが、青年はだったらと動く。

「だったらワイは手札から「俊足のギラザウルス」を特殊召喚！こいつは手札から特殊召喚が可能、その代わり特殊召喚に成功した時、相手は墓地からモンスターを無条件で特殊召喚できるが、お前の墓地にモンスターはない！」

俊足のギラザウルス 攻撃力：1400

つまり実質「デメリットなし」での特殊召喚というわけだ。さらに青年はもう一体「俊足のギラザウルス」を特殊召喚。召喚が制限されたにも関わらず二体のモンスターを展開してみせた速さに観客が「おお」と歓声を上げた。

「どうせギャンブル使いたさに苦し紛れで伏せたカードやろ！三枚の伏せカードにビビるワイやないで！バトルや！俊足のギラザウルスで一撃必殺侍に攻撃!!」

「この瞬間、一撃必殺侍の効果発動！このカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に発動してコイントスを一回行い、裏表を当てる。当たった場合、その相手モンスターを破壊する」

突進するギラザウルスに応戦しようと槍を構える侍、その頭上でコインがくるくると回転し始めた。

「表だよ」

そして彩葉が宣言すると同時にコインが弾かれ、侍も槍を構えながらギラザウルス目

掛けて突進。ギラザウルスの爪が振るわれ、侍の槍が突き出される。

そして僅かな硬直の後に倒れたのは侍の方。彼の頭上のコインは裏を示していた。

「きやあああああつ！」 LP 4000 ↓ 3800

「へっ、ざまあみい。ギャンブルなんぞに頼るからそうなるんや。ゆけ、俊足のギラザウルス！」
ダイレクトアタックや！」

ギラザウルスと一撃必殺侍の戦闘が行われたことによるダメージが発生。黒い電流が彼女の身体を流れ、ライフが削られる。苦痛に悶える彼女を見ていい気味だと笑う青年はもう一体のギラザウルスに追撃を指示、しかしその時彼女の場のカードが翻った。

「永続罨発動「リビングデッドの呼び声」！ 墓地の「一撃必殺侍」を攻撃表示で特殊召喚！」

一撃必殺侍 攻撃力：1200

「性懲りもなく！ 叩き潰せギラザウルス！」

再び現れた一撃必殺侍の頭上でコインが回転開始。彩葉がまたも「表！」と宣言してギラザウルスと侍が交差。そして今度倒れたのはギラザウルスの方だった。彼の頭上のコインは表を指している。

「一撃必殺侍の効果成功♪ でもダメージステップ開始時の効果破壊だから戦闘ダメージは受けないよ」

「クソが！ メインフェイズ2に入ってワイはモンスターをセット！ 召喚出来ないだけならセットは可能なはずや！ さらにカードを一枚セットしてターンエンド！」

「わー。召喚とセットの違いが分かってるなんておにーさんすごい♡」

「じゃかあしい！ お前のターンや、さっさとドロウせえ！」

モンスターとカードを一枚ずつセットしてターン終了を宣言する青年に、彩葉はパチパチと拍手で賞賛。しかし青年はイライラした様子で彩葉を怒鳴りつけ、彼女は「はいはい」と言つてターン開始を宣言するようにカードをドロウした。先ほどのギャンブル成功もあつて手札は合計六枚、その状態に青年もチツと舌打ちを叩いていた。

「私は一撃必殺侍を生贄に捧げ、「ブローバック・ドラゴン」を召喚！」

ブローバック・ドラゴン 攻撃力：2300

「攻撃力2300……」

一撃必殺侍を生贄にして現れた上級モンスターの攻撃力は上級モンスターとしてはやや物足りない数値。それに青年はハツタリかと笑い、むしろ最悪戦闘すら行えない侍が消えたことに内心で安堵していた。

「ブローバック・ドラゴンの効果発動だよ。一ターンに一度、相手フィールドのカード一枚を対象とし、コイントスを三回行ってその内二回以上が表だった場合、その相手のカードを破壊する。おにーさんの場の伏せカードを対象にするよ。どうする？ 破壊

されるかもしれないけど……」

「ちい、やったらチェインしてリバースカード発動「威嚇する咆哮」！ これでお前はこのターン攻撃宣言を——」

「させないよ。カウンタートラップ発動「魔宮の賄賂」。魔法・罠カードの発動を無効にして破壊し、代わりに相手はカードを一枚ドロウする」

「——なにいつ!？」

ブローバック・ドラゴンの効果から逃れようとカードを発動するも、それを一枚ドロウと引き換えに無効にされる青年。上手くノセられたと歯噛みしつつ、だがドロウできたのはよしと立て直す。

その間にブローバック・ドラゴンの効果処理も開始され、三枚のコインのソリッドビジョンが宙を舞う。そして落ちてきたそれは表・裏・裏を示し、ブローバック・ドラゴンの頭部の銃が不発に終わる。効果失敗だった。

「ありやーぎーんねん。ま、いつか。おにーさんのカード無駄打ちさせたって事で♪」
「ぐぬぬ……」

肩をすくめてペろつと舌を出す彩葉。青年が怒りに腕を震わせていた。

「バトルだよ。ブローバック・ドラゴンで俊足のギラザウルスを攻撃！」

「ぐっ……がああああああああつ!」 LP4000↓3100

ブローバック・ドラゴンの頭部から放たれた銃弾がギラザウルスを撃ち抜き、粉碎。そのダメージが衝撃増幅装置によって電流として青年の身体に流れ、彼に苦悶の悲鳴を上げさせる。その様を見た観客も歓声を上げていた。

「メインフェイズ2に魔法カード「タイムカプセル」を発動。デツキからカードを一枚除外して、私の二回目のスタンバイフェイズにタイムカプセルを破壊、この効果で除外したカードを手札に加える。なんのカードを入れたのか、二ターン後を楽しみにしててね、おにーさん♡ ターンエンドだよ」

「ちい、ワイのターン、ドロー!」

「このスタンバイフェイズに死神の巡遊の効果発動!」

「またもコインが宙を舞い、落ちてきたコインが出目を示すと共にフィールドを黒い霧が覆い始める。」

「く……」

「ひやつははは! ざまあみい。たしか裏が出た時はお前は次の自分のターン召喚・反転召喚する事ができないんやっとな!」

「コインが示したのは裏。先ほどのターンは青年の展開を封じていた黒い霧が今度は彩葉の場を覆い隠した。今度は自分が自分のカードで苦しめられる番だざまあみろと青年が高笑い。」

「この隙を逃すと思うなよ！　ワイは手札から「屍を食る竜」を召喚し、さらにセットモンスター「二頭を持つキングレックス」を反転召喚や！」

屍を食る竜　攻撃力：1600

二頭を持つキングレックス　攻撃力：1600

「うわ、今時そんな微妙なカードよく使うね……」

「余計なお世話じゃ！　ワイは魔法カード「運命のウラドラ」を発動！　ライフを1000ポイント払い、自分フィールドの表側表示モンスター一体を対象として相手ターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力は1000アップ！　さらにそのモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、自分のデッキの一番下のカードをお互いに確認し、デッキの一番上または一番下に戻す。さらに確認したカードがドラゴン族・恐竜族・海竜族・幻竜族モンスターだった場合、その攻撃力1000につき一枚、自分はデッキからドロー。その後、自分はドローした数×1000LP回復する！　ワイは二頭を持つキングレックスの攻撃力をアップする！」LP3100↓2100

二頭を持つキングレックス　攻撃力：1600↓2600

煽るところか素で引いている様子の彩葉に怒鳴り返しつつ青年は新たな魔法カードを発動。それと共にどこからともなく鳴り響く銅鑼の音を聞いた二頭を持つキングレックスが咆哮、その攻撃力が一気に上昇してブローバック・ドラゴンを上回る。

「バトルや！ 二頭を持つキングレックスでブローバック・ドラゴンを攻撃イ！」

「くっ、あああああっ!!」 LP3800↓3500

キングレックスの二つの頭がブローバック・ドラゴンを噛み砕き、破壊。彩葉の身体を黒い電流が流れて彼女を傷つける。

「運命のウラドラの効果！ デツキの一番下のカードを確認させてもらうで……」

そして青年はデツキボトムのカードを引き抜き、破顔して見せつける。

「いよっしや！ デツキの一番下のカードはドラゴン族「タイラント・ドラゴン」！ これをデツキの一番下に戻し、さらに確認したタイラント・ドラゴンの攻撃力は2900！ よって二枚デツキからドローしてライフを2000回復や！」 LP2100↓4100

「おお、面白くなってきたな」

「これはもしかすると、ヘルキャットが負けるかも……」

「大穴狙った甲斐があったぜ！」

一気に二枚のドローに成功しただけではなく、さらに2000のライフ回復。その光景に観客達が騒ぎ出し、それに何か昔でも思い出したのか青年は上機嫌に笑いだした。

「キツヒヒヒ。ワイのバトルフェイズはまだ終わつとらん！ 屍を貪る竜と俊足のギラザウルスでダイレクトアタックや!!」

「つ、ぎやああああああっ!!」LP3500↓500

青年の場の二体の恐竜族モンスターの総攻撃力は3000。そんなダメージが電流としてプレイヤーに直接流し込まれ、流石の彩葉も苦痛の悲鳴を上げていた。

「キヒヤヒヤヒヤヒヤ! ざまあみい! ワイはカードを一枚セットしてターンエンドや!」

「つ……私のターン、ドロー」

「無駄や無駄。召喚も出来ん以上、お前に出来るのはカードのセットくらいやろうが」

電流のダメージが効いているのかややよろけつつもカードをドロウする彩葉に、青年は無駄だと煽る。たしかに死神の巡遊による黒い霧が彼女の場を覆っており、召喚・反転召喚は出来なくなっている。そう、召喚・反転召喚が封じられている。

しかし彩葉はニヤツと笑みを見せた。

「それならこうするだけだよ♪魔法カード「死者転生」を発動、手札を一枚捨てて墓地の「ブローバック・ドラゴン」を手札に加え、魔法カード「融合」を発動! 手札の「リボルバー・ドラゴン」と「ブローバック・ドラゴン」を融合! 現れる、「ガトリング・ドラゴン」!!」

ガトリング・ドラゴン 攻撃力:2600

「し、しまった……死神の巡遊では特殊召喚は封じられてない……」

彩葉のフィールドに現れる、三つの首の頭部にガトリング砲がついた機械龍。その姿に青年が目を見開いた。

「ガトリング・ドラゴンの効果発動だよ。一ターンに一度、自分のメインフェイズにコイントスを三回行う。そして表が出た数だけ、フィールド上のモンスターを破壊する」

「な、なんやてえっ!?!」

つまりノーコストで最大三体破壊。今青年の場にいる三体の恐竜族モンスター、その全てが一掃される可能性がある。そんなとんでもない効果に青年が驚いている間に、またも三つのコインのソリッドビジョンが宙を舞い、落っこちる。それは表・裏・表を示していた。

「よし、二体破壊の権利を得た。私が破壊するのは二頭を持つキングレックスと屍を貪る竜!!」

彩葉の宣言と共にガトリング・ドラゴンの三つの頭部に装備されているガトリングが急激に回転を開始、そしてガガガガツと連続した銃声と共にガトリングから放たれる弾丸が青年の場を襲い、二つの爆発が彼の場を覆う。

そしてその爆発によって生じた煙が消えた時、青年の場から彩葉の宣言した二体の恐竜族モンスターが消えていた。

「バトル、ガトリング・ドラゴンで俊足のギラザウルスを攻撃だよ! ガトリング・ラッ

シュー！」

「つ、ぐあああああつ!!」LP4100↓2900

その攻撃宣言と共に再びガトリングが回転をし始めた。キャリリリリという回転音と共にズカカカカカツという銃声が響き、それを浴びたギラザウルスが破壊。さらにその余波は青年にまで届き、黒い電流が流れて彼に苦悶の顔を浮かばせる。

「カードを一枚セットしてターンエンドだよ♪」

そして彩葉は最後の手札をセットしてターンエンドを宣言した。

「ワイのターン、ドロー！」

「スタンバイフェイズに死神の巡遊の効果発動！」

青年があと一息と気合いを入れてカードをドローするとまたも死神の巡遊の効果が発動、コインのソリッドビジョンが宙を舞う。それが裏を示し、彩葉の場が黒い霧に包まれる。

「ヒヤツハハハ！ 本当に運に見捨てられたようやお。やけど容赦はせんぞ！ 魔法カード「闇の量産工場」を発動！ 墓地の通常モンスター二体、「二頭を持つキングレックス」と「屍を食る竜」を手札に加え、魔法カード「融合」発動！ さつき手札に加えた二体を融合し、「ブラキオレイドス」を融合召喚!!

さらに手札から魔法カード「究極進化薬」を発動！ 自分の手札・墓地から、恐竜族

モンスターと恐竜族以外のモンスターを一体ずつ除外して発動でき、手札・デッキからレベル7以上の恐竜族モンスター一体を召喚条件を無視して特殊召喚する！ワイは手札から爬虫類族の「バルーン・リザード」を、墓地から恐竜族の「俊足のギラザウルス」を除外して、デッキからレベル7の「暗黒恐獣」ブラック・ティランを特殊召喚！！」

ブラキオレイドス 攻撃力：2200

暗黒恐獣 攻撃力：2600

青年の場に現れる二体の恐竜族。特に暗黒恐獣の攻撃力はガトリング・ドラゴンと並んでおり、暗黒恐獣とガトリング・ドラゴンの相討ちでフィールドを開けたところにブラキオレイドスのダイレクトアタックが決まれば勝利。観客がそう思った時、青年の場のカードが翻る。

「トランプカード「生存競争」発動や！このカードは自分フィールドの恐竜族モンスター一体を対象とし、攻撃力1000アップの装備カード扱いとして、その自分の恐竜族モンスターに装備する！さらに生存競争にはこのカードの効果でこのカードを装備したモンスターが攻撃で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時に発動でき、装備モンスターは相手モンスターにもう一度だけ続けて攻撃できる効果があるが……どうせお前の場にモンスターは一体。それに追撃するまでもない……」

暗黒恐獣 攻撃力：2600↓3600

青年がやれやれと頭を振り、にやあツと笑う。彩葉は顔を青くしてふるふる震えていた。

「や、やだ……やめて……」

「残念やったのう。ワイが相手だった不運を嘆くんやな！ この攻撃で終わりや！ バトル！ 暗黒恐獣でガトリング・ドラゴンを攻撃!!」

完全に恐怖している彩葉を見て自慢気に笑いながら青年が攻撃を指示。暗黒恐獣がガトリング・ドラゴンに襲い掛かり、その強靱な牙で噛み砕く。耐えきれなくなったガトリング・ドラゴンが爆発し、その爆風が彩葉を包み込む。

「あああああああつ!!!」

「これでワイの借金はチャラじゃあつ!!」

爆風によって現れた煙の中から彩葉の悲鳴が響き渡る。その意味を悟った青年がガッツポーズを取り、煙が少しずつ晴れていく。その中には無様に倒れている彩葉の姿が……

「なあーんちゃって♡」LP2500

なかった。彼女は先ほどまでの青い顔はどこへやら、むしろ全て予想通りですと言わんばかりにニヤニヤと笑いながら立っており、そのライフはむしろ先ほどより増えている。

「なっ……なんでや!! お前のライフは残り500、生存競争で強化した暗黒恐獣で攻撃すればライフは削り切れるはず……」

「リバースカードを発動したんだよ。速攻魔法「非常食」♪ これによって私は無意味にフィールドに残っていたりビンゴデッドの呼び声、死神の巡遊、そして伏せカードの三枚の魔法・罠カードを墓地に送り、ライフを3000回復したんだよ♪」

つまり攻撃直前の彩葉のライフは3500。その状態から攻撃力3600の暗黒恐獣で攻撃力2600のガトリング・ドラゴンを攻撃した結果の1000ポイントの戦闘ダメージを受けてもライフはたしかに2500残る計算になる。

「くっ、だったらブラキオレイドス！ ダイレクトアタックや!!」

「きやあああああぁあつ!!」 LP2500↓300

だが続いている2200のダイレクトダメージは防ぐことは出来ず、とうかさっきの1000ポイントのダメージも受けている事は受けているため合計3200のダメージが衝撃増幅装置によって彼女の身体に送られる。

「しぶといやつぢやなあ。だがこれでお前の場にモンスターはなく、魔法・罠も使い切った。手札は次のドロー一枚や、大人しくサレンダーするんならまあ許してやらんでもないで？ ターンエンドや」

「……魔法・罠を使い切った？」

青年はせめてもの情けだというように彩葉に言うが、それに対して彩葉はきよとんとしながらカードをドロ。その瞬間彼女の床がひび割れ、そこから棺型タイムカプセルが出現、それを見た青年の目が見開かれる。

「し、しまった!?!」

「タイムカプセル発動後、二回目のスタンバイフェイズ。私はタイムカプセルを破壊し、棺に入れたカードを手札に加えるよ♪」

彼女の場に密に残っていたカード——タイムカプセル。それが破壊され、棺の中に封印されていたカードが彩葉の手に渡った。彩葉のニヤリとした笑みが深くなる。

「魔法カードフュージョン・リカバリ「融合回収」を発動。墓地から融合の魔法カードと融合に使用した「リボルバー・ドラゴン」を手札に加えるよ」

「そんなモンスターが今更何に……」

まず発動したのはタイムカプセルに入っていたカードではなく、このターンドロールしたカード。これで彼女の手札に融合とその素材として使用できる可能性のあるモンスターが渡る。

ぼやきつつももしやまたガトリング・ドラゴンかと身構えている青年に対し、彩葉は「融合を発動!」と宣言する。

「私はタイムカプセルに眠っていた「時の魔術師」と、効果モンスターである「リボル

「バー・ドラゴン」を融合!!」

「と、時の魔術師やお!?!」

タイムカプセルに眠っていたと言われたカード——時の魔術師。そのカード名を聞いた青年が仰天し、その間に二体のモンスターが神秘の渦に巻き込まれて融合。

「現れる、「時の魔導士」!!」

時の魔導士 攻撃力：20000

「時の魔導士……この姿、融合素材……まさかッ……」

彩葉の場に出現するのは時計の姿をした魔法使いというべきだろう存在。だがその姿を見た青年は歯ぎしりをしており、彩葉はニヤニヤしながら口を開く。

「さあ、ラストギャンブルの時間だよ。おにーさん♡ 時の魔導士の効果発動、一ターンに一度、このカードが融合召喚されている場合に発動でき、時の魔導士の杖の先のルーレットを回し、成功すればフィールドのモンスターを全て破壊し、相手は表側表示で破壊されたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値の半分のダメージを受ける。

失敗すればフィールドのモンスターを全て破壊し、自分は表側表示で破壊されたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値の半分のダメージを受ける」

「な……つまりっ……」

今フィールドのモンスターの元々の総攻撃力は 暗黒恐獣 26000 + ブラキオレイドス 22000 + 時の魔導士 20000 の6

800、その半分は3400。残りライフ300の彩葉はもちろん残りライフ2900の青年でも耐えきれない。

つまりこれから行われるギャンブルに勝った方がこのデュエルの勝者になる。という事だ。

「さあ、時の魔導士。タイム・ルーレットスタート！」

「タイム・ルーレット！」

彩葉の掛け声に合わせて時の魔導士が杖を掲げて宣言。同時に杖の先のルーレットが回転し始めた。大きく四つに分けられているルーレットは内二つが成功を意味する「当」、内二つは失敗を意味するドクロマークになっている。その成否判定を行う時計の矢印が勢いよく回転し、徐々にその回転が遅くなっていく。

彩葉はさあどうなるのかと期待を込めた様子で、青年がどこか怯えた様子で、観客達も固唾を飲んでルーレットの行く先を見守る。

そしてついに針が停止した時、金網の外でこの戦いを見物していた観客達が『うおおおおおっ!!!』と歓声を上げる。

「な、あ、え、え、あ……」

青年の顔が青くなる。それもそうだろう、針が指し示しているのは「当」。それはこの勝負、青年の敗北を意味することでもあった。

「時の魔導士の効果により、フィールドの全てのモンスターを破壊。その元々の攻撃力の合計の半分のダメージを受けてもらうよ、おにーさん♡」

「あ、あ、あ、あ……」

「タイム・ソーサリー!!」

顔を青くする青年に彩葉は無邪気に笑いながら宣言。同時に時の魔導士の魔法によつて時空が歪み、その狭間へと全てのモンスターが消え去っていく。

「うぎやあああああああああつ!!」LP2900↓0

そしてその際に溜まったエネルギーの全てが青年へと降り注ぐ。その一撃によつてライフが尽きたことを示すブザー音と青年の悲鳴がこのデュエルの終了を示すのであった。

「そ、そんな……ありえへん……ワイはプロデュエリストなんや……昔は全国大会で準優勝もしたことがある……そのワイが、こんなガキに負けるなんて、そんな、そんなわけ……」

「んふ♪ けっこー楽しかったよ、おにーさん♡ また遊んでね♡ ま、次があればだけど」

「ひい!？」

青年は自らの敗北が信じられないとばかりに呆然とした表情をしていたが、彩葉が満面の笑みを浮かべながら手を振って声をかけると我に返ったように細かい悲鳴を上げる。そして金網の扉部分が開かれたかと思うとそこから黒服グラサンのお約束な格好をしたガタイのいい男達がぞろぞろと入ってくると青年を拘束する。

彩葉がにぱつと無邪気な微笑みを青年に向けた。まるでその笑顔が彼の人生最後に送られる笑顔だというように。

「じゃ、おにーさん。今回の負け分含めて、借金の支払い頑張つてね♡」

「ま、負け分!? なんのことや!？」

「あれ、聞いてないの? このデュエル、おにーさんは今までの借金を返せる分のお金を稼げるだけの金額を自分の勝利に賭けてデュエルしてたんだよ?」

「な……」

「でも結果はおにーさんの負け。その負け分、また借金が増えちゃったね。ごしゅーしよーさま♡」

青年が訳が分からないという様子で彩葉に叫ぶが、彼女はニヤニヤ笑いながら事も無げに説明。彼女の言葉を聞いて崩れ落ちた青年の元に歩き寄ると、崩れ落ちたことで立っている自分よりも下に顔のある彼を見下ろすようにして嘲笑を浮かべた。

「ざあこ♡ ざあこ♡ 借金まみれで一発逆転狙って地下デュエル♡ こんなガキなら余裕だと捕まえて大勝負♡ 勝ち確だと思つてたところコイン一枚でひっくり返されて逆転負け♡ こおんな中学生に人生終わらされちゃって、今どんな気持ちい?」
「ぐ、ぐう……うわああああつ!!」

彩葉の言葉責めに青年は泣き叫びながら暴れるが屈強な男達に押さえつけられてしまいで済むことも出来ない。そんな彼を彼女はクスクスと笑いながら見下ろしていた。

「さーて、それじゃあ本日のホントのメインイベントを始めよつかあ♪」

そう言つて彩葉はいつの間にか自分の隣に控えていた一人の黒服から渡された一枚の紙を、青年の目の前に見せびらかすように向ける。それには「借用書」と書かれていた。

「あなたは多額の負債を抱えました♡ よつてこれより、あなたの身柄をとある組織に引き渡すことに決定しました♡ そ・し・てえろ♡ ここに書かれている通り、これからおにーさんには楽しい楽しい地獄巡りの旅をしてもらいまあす♡」

「いやだああああ!! ワイは、ワイは——死にたくないいいいい!!」

青年の言葉など無視して彩葉はこれまた黒服から渡されたスイツチを押す。すると二人を囲んでいた檻の一部が、まるで巨大な獣が獲物を喰らおうと口を開いたかのよう

に開き始め、青年はそれに恐怖したのか必死に逃げようとし始める。しかしそんなことは許されず、彼は黒服の男達の手によって強制的に歩かせられるとそのまま開かれた檻から連れ出される。

「いやだいやだいやだっ！ 助けてくれえええっ!!」

青年はそんな風に喚きながら抵抗するが誰も耳を貸さない。そして彼は自分が入ってきた扉とは別の扉へと運ばれていく、彼が今からどこに行くのか、彼女は知らないし興味もない。

彼女はにまにまと笑いながらその光景を見送ると、何事もなかったかのように自分もその牢獄スタジアムを後にする。この勝負の結果によって片や熱狂、片や悲鳴を上げる観客達、自分達の勝負で大金が動くレベルの賭けをしていた富豪達の声を背中でも聞きながら。

「いやー、今日も楽しかったなー♪」

牢獄スタジアムを出て行き、廊下を歩きながらそんなことを呟く彩葉は無邪気な笑みを浮かべている。

今更ながらここはぶっちゃけ違法な地下デュエル場。そこで彩葉は運営側のデュエリストとして雇われての地下デュエルを行っていた。彼女の担当は主に借金を背負ったデュエリストの相手で、その代わり彩葉自身も「彩葉の勝利」限定だが賭けに参加す

ることが許されており、もちろん負ければ運営側だろうと関係なく金を奪われ負債を負わされるが、逆に勝利すれば大金が手に入る。

さらに彩葉はまだ子供だと自分を侮って「こいつなら勝てるし勝てば借金チャラだ」と思つて勝負を仕掛けてきた相手に対してわざと追い詰められ、そこで逆転する。つまり相手に勝てるという希望を味わせた上で一瞬で逆転勝利、逆転負けという絶望に突き落とされる借金クズ達を見るのにつきしか快感を覚えていた。

そして今回もまたそうだった。相手の男は最後の最後まで自分に勝機があると信じて疑わなかっただろうが、それが全て覆された時のあの表情がたまらなくて仕方ないのだ。その上に大量のお金まで貰えらるとなれば彩葉にここを出て行く選択肢など存在しなかった。

「んふ、また次のデュエルが楽しみだなあ♡」

そんなことを考えつつ、彩葉は上機嫌で鼻歌を歌いながら地下デュエル場の中を歩いていくのだった。

特殊勝利系メスガキデユエリストの話

逃げ場のない牢屋の中、まるでコロシアムのように金網で囲まれているその中で一人の20代半ばから後半くらいだろう、水色髪のおかつば頭に虫を思わせるデザインをした眼鏡をかけた青年が目を血走らせて、目の前に立つ中学生くらいの、黒いパーカーを着ていてフードを被り、そのフードにネコミミがついていることからまるで黒猫を思わせるような猫目の少女を睨みつけていた。対する猫目の少女はニヤニヤと笑いながらその睨みや殺気を受け流している。

「ヒョツヒョヒョヒョ、悪く思うなよお？ 俺の借金をキャラにするために、お前をぶつ潰してやる……」

「んっふっふっ♪ 楽しもーねー♪」

青年の言葉に少女はゆらゆらと揺れながら余裕綽々な様子で笑いながら答える。その様子に青年がチツと舌打ちを叩いた。

「さあ、本日のメインイベントオ！ デスマッチデユエルを開催するぜえー」

スピーカーからそんな実況が聞こえ、牢獄コロシアムの外でまるで見世物のように二人を見物してワインや軽食を嗜んでいる仮面をつけた男女が牢屋を見る。

「赤コーナー。若いなれどデュエルセンスは超逸品のオカルティックガール。ヘルキヤット彩葉！」

「応援よろしくお願いしまーす♡」

紹介を受けた少女——彩葉が観客に媚びを売るように手を振って挨拶、彼女のファンなのか知らないが観客の一部が「おおおおおっ！」と盛り上がる。

「いいぞー彩葉ちゃん！」

「君にまた大金を賭けたんだー！」

「また面白いデュエルを見せてくれー！」

黄色い声を上げる観客に青年が忌々しそうな舌打ちを叩き、実況が続いて青コーナー、と口にした瞬間彼の声が響く。

「紹介なんて無駄な時間はいらぬいよ！ とつとつこいつを倒して、俺の借金チャラにしてもらおうか！」

「……えー、ではまあ。省略いたしましょう」

青年の怒号に実況は彼の紹介を省略。

「あつははははは！」

「いいぞーチャレンジャー！」

「大穴でお前に賭けたんだー！ 勝ってくれよー！」

彩葉に対する声援に比べると嘲るような笑い声が混じった応援に青年がイライラしたように歯ぎしり。そう思っていると突然牢屋に入ってきたグラサン黒服のいかにも男達が、青年の両腕や首に何かの装置を嵌め始めた。

「お、おい、なんだよこれ!?!」

「衝撃増幅装置。僅かなダメージでも全身に苦痛が走ります」

「なんだって?! そんなもの聞いてないぞ?!」

牢屋の外、丁度青年の背後を陣取るような形で立っているシルクハットにコート姿な瘦躯の男性の言葉に青年が声を上げるがお構いなし。「これが地下デュエル」と締めくくるのみだった。

「ちいっ! まあいい。約束通り、このクソガキを倒せば俺の借金をチャラにしてくれるんだろうな?!」

「お約束いたします」

青年の言葉に瘦躯の言葉はそう返すのみ。青年はだったらいいと言いたげな様子で、慣れたように件の衝撃増幅装置を装着した彩葉を再び血走った目で睨みつけた。彩葉もニヤニヤ笑いをしながら青年を見て、二人はデュエルディスクを構える。

「デュエル!!!」

「イツツア、ショータイム!!!」

そして二人の掛け声とデスマッチデュエルなる地下デュエルの開始を宣言する実況の声が重なり合った。

「先攻は私だね。ドロロー……私は魔法カード「成金ゴブリン」を発動。デッキから一枚ドロし、その後相手はライフを10000ポイント回復する」

「キヒヒ、いきなり手札事故か？ ま、ありがとさん」LP4000↓5000

「……モンスターをセット、カードを一枚セットしてターンエンドだよ」

「俺のターン、ドロロー！ ヒヒヒ。俺は魔法カード「予想GUY」を発動！ このカードは自分フィールドにモンスターが存在しない場合にのみ発動でき、デッキからレベル4以下の通常モンスター一体を特殊召喚する！俺はレベル2の通常モンスター

ベリック・インセクト
「昆虫人間」を特殊召喚！」

昆虫人間 攻撃力：500

彼の場に姿を現すのはまさしく人間のような姿をした昆虫。しかしその姿を見た彩葉がクスリと冷たい笑みを見せた。

「きゃっは♡ わざわざそんな雑魚い虫さんなんて特殊召喚しちゃうなんて♡」

「キツヒヒヒ。俺の昆虫族デッキの恐ろしさ、じつくりと教えてやる！ 昆虫人間を墓地に送り、魔法カード「馬の骨の対価」発動！ 効果モンスター以外の自分フィールドの表側表示モンスター一体を墓地へ送って発動でき、俺はデッキから二枚ドロする！

続けて魔法カード「苦渋の決断」を発動！ デッキからレベル4以下の通常モンスター一体を墓地へ送り、その同名モンスター一体をデッキから手札に加える。俺はレベル2の通常モンスター、二枚目の「昆虫人間」をデッキから墓地へ送り、同名モンスター、三枚目の「昆虫人間」を手札に加える！

さらに速攻魔法「手札断殺」を発動！ 互いのプレイヤーは手札を二枚墓地へ送り、新たにカードを二枚ドロウする！

「私も二枚捨てて二枚ドロウするね」

青年は先程出したモンスターをコストに手札を増やし、さらにデッキから墓地を肥やしつつカードのサーチ。さらには手札交換へと繋げる。

「キヒヒヒ……」LP5000↓6000

するとその時青年の気味の悪い笑い声と共に彼のライフが回復。彩葉が「え？」と呆けた声を出すと彼は笑みを深くしながら、先ほど捨てたカードの一枚をデュエルディスクの墓地ゾーンから取り出し、彩葉に見せつけた。

「ドクロがん「レディバグ天道虫」のモンスター効果さ。このカードが墓地に送られた時、自分は1000ライフポイント回復する。俺は手札断殺で昆虫人間と天道虫を墓地に送った。よってライフが回復したってわけさ」

「ふ〜ん。でも、そこまで色々やってフィールドにモンスターはいないよ？」

「心配無用さ。むしろ、俺はこの瞬間を待っていた！俺は自分の墓地のレベル2以下の通常モンスター3体、3体の「昆虫人間」を対象に、魔法カード「トライワイトゾーン」！この三体の昆虫達を特殊召喚する!!」

昆虫人間 ×3 攻撃力：500

青年の発動した魔法カードによって一気に出現する三体の昆虫族モンスター。効果を持たない弱小モンスターと言えど一気に三体のモンスター展開には観客達も驚きの声を上げている。

「さらに昆虫人間の一体を生贄に捧げ、「アルティメット・インセクト LV5」を召喚！」

アルティメット・インセクト LV5 攻撃力：2300

そしてまだ使っていないなかった召喚権を行使。昆虫人間の内一体を生贄にさらなる上級モンスターへと繋げてみせた。だが、まだ終わらないとばかりに青年は手札を取る。

「永続魔法「大樹海」を発動！フィールド上に表側表示で存在する昆虫族モンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、そのモンスターのコントラローラーは破壊されたモンスターと同じレベルの昆虫族モンスター一体をデッキから手札に加える事ができる！これでその伏せカードが除去カードだったとしてもリカバリー可能だ。」

バトル！ アルティメット・インセクトで守備モンスターを攻撃！」

青年の命令を受けると同時にアルティメット・インセクトが彩葉の場の守備モンスター目掛けて突進、姿を現した天使のようなモンスターをそのまま跳ね飛ばした。

「く……「スケルエンジェル」のリバース効果発動。私はデッキから一枚ドロウする」

「ヒョヒョヒョ、守備力400か。昆虫人間で充分だったな。まあいい、残る昆虫人間二体でダイレクトアタックだ！」

「つー」LP4000↓3500↓3000

彩葉の守備モンスターのステータスを見た青年は馬鹿にしたように笑いながら追撃を指示、それに従った二体の昆虫人間が彩葉に襲い掛かり、彼女のライフが減少。

「きゃあああああつ!!」

同時に彼女につけられた装置から黒い電流が流れ、彼女の甲高い悲鳴がデュエル場に響き渡る。

「な……」

そのあまりの悲鳴に攻撃をした青年側でさえ引いている程だった。

「ふっふっふ。驚きましたか？　これが地下デュエル場名物デスマッチデュエル。デュエリストは文字通り、己の命を賭け、命を削って戦いあう……」

「っ……」

瘦躯の男性の言葉に青年は己につけられた装置を見下ろし、ぞくりと身体を震わせる。もしも自分のライフが削られたらあんな目にあう。それを間近で見せられた青年は唸り声を上げた。

「だったら、ライフを削らせずに勝てばいいんだ！俺は永続魔法「虫除けバリアー」を発動！相手フィールド上に表側表示で存在する昆虫族モンスターは攻撃宣言をする事ができない！カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

青年の場に張り巡らされる虫除けのバリアー。しかし彩葉の場に昆虫族が出るとは限らない状態でのこのカードの使用に観客達が戸惑いの声を上げていた。

（俺の伏せカードは「DNA改造手術」……あいつが何を出してこようが、これで昆虫族を指定してやれば虫除けバリアーの効力は最大限に発揮される……）

「私のターン、ドロウ」

そんな中、青年だけは己の戦略で防御を固めようと考え、彩葉はさつきまで悲鳴を上げていたのが嘘のようにニヤニヤ笑いながらカードをドロウ。六枚になった手札をさっと眺め、ニヤリと笑みを見せた。

「惑星探査車」を召喚して、生贄に捧げて効果を発動するよ。デッキからフィールド魔法カード一枚を手札に加える」

デッキから取り出した一枚のカードを口元に持つていき、ペろりと舌を出して目を細

めた。

「フィールド魔法「ダーク・サンクチュアリ」を手札に加えて、そのまま発動するね」

そう言い、フィールド魔法ゾーンにフィールド魔法を置いたその時。牢屋の中が薄暗い瘴気に満たされて言う。さらにその天井からは不気味な目玉がデュエリスト達を見下ろし始め、青年はヒツと小さな悲鳴を上げるがプルプルと首を横に振って恐怖を振り払う。

「そ、そんなこけおどし！」

「んふふ、それはどーかなあ？ 私はカードを四枚セットしてターンエンド」

そして彩葉は残った手札から四枚取って無造作にデュエルデスクに差し込み、一気に魔法・罨ゾーンを全て使ってカードをセットしターンエンドを宣言した。

「ヒョッヒョヒョヒョ！ いきなり四枚もセット？ 手札事故かこけおどしか。そんなものに引つかかる俺じゃないんだよねえ！」

俺のターン、ドロー！ このスタンバイフェイズにアルティメット・インセクトLV

5は成レベルアップ長する！ 自分ターンのスタンバイフェイズ時、表側表示のこのカードを墓地

に送る事で、「アルティメット・インセクト L V 7」一体を手札またはデッキから特殊召喚する！ 来い、「アルティメット・インセクト L V 7」!!」

アルティメット・インセクト L V 7 攻撃力：2600

アルティメット・インセクトの背中が割れ、まるで蛹のような姿から羽化したかのような姿へと成長^{レベル・アップ}。背中の羽根を広げて空を飛ぶアルティメット・インセクトからは鱗粉が舞い散っていた。

「アルティメット・インセクトLV7はLV5からレベルアップした時、敵を蝕む毒の鱗粉を振りまく能力を得る。その毒鱗粉の前では全ての相手モンスターの攻撃力・守備力は700ポイントダウンするのさ！」

もつとも、モンスターがいなけりや毒鱗粉も意味がないけどね。バトル！ 不気味なフィールド魔法だが、そんなものに引つかかる俺だと思わない事だなあ！ アルティメット・インセクトLV7でダイレクトアタックだあつ!!」

恐怖を振り払うように声を上げて攻撃宣言を行う青年に従い、アルティメット・インセクトが彩葉に襲い掛かろうとする。その時突如アルティメット・インセクトが沈黙したかと思うと、その身体から何かが噴き出して青年へと襲い掛かった。

「な、ぎええええええつ?!」 LP6000↓4700

「きやつはラッキー♡」

突然襲い掛かってきた何か、まるで青白い靈魂に怯んでその突進をもろに受けた青年が悲鳴を上げ、彩葉はきやはつと笑ってラッキーと漏らした後、ニヤニヤと微笑んだ。

「ごめんねおにーさん、言い忘れてた♡ ダーク・サンクチュアリには気まぐれな亡霊さ

んがたつくさん潜んでてね。攻撃を仕掛けようとしてきた敵対者に気まぐれに取り憑いて攻撃を封じると共に、その攻撃を指示した相手に報復してくるんだ♪ 気をつけないと自分の身体が傷ついちゃうよ〜?」

「う……うぎやああああああつ!!」

結果はどうあれダメージを受けたことには変わりはなく、青年は己の身体を流れる電流の痛みに悲鳴を上げる。

「く……」

そして電流が流れ終わった後、青年は考え始める。彼の場合にはまだ攻撃表示の昆虫人間が二体存在している。攻撃力が低いとはいえ今相手の場にモンスターはおらず、ダイレクトアタックのチャンスである。しかしダーク・サンクチュアリが存在する限り、運が悪ければまたさっきの効果ダメージを受ける羽目になる。

そう、再び、さっきの電撃を受ける可能性がある。そんな思考が混ざった瞬間、青年はクツと唸り声を上げた。

「俺は昆虫人間二体を守備表示に変更! ターンエンドだ!」

昆虫人間 × 2 攻撃力: 500 ↓ 700

「あれえ? 昆虫人間二体で攻撃しないのお? 臆病者さーん♡」

「ふ、ふん！ ガキには分からないだろうがこれは大人の戦略なんだよ！ そのフィード魔法を除去してから確実に仕留めてやる！」

「あはっ、こわーい♡」

攻撃を躊躇った青年に対して彩葉が小馬鹿にしたような嘲笑を向けるも、青年はそれを戦略だと反論。その言葉に彩葉は手を口にやってあはつと笑った。

「——そう上手くいくといいねえ？」

直後、その笑みに嘲りが走り、同時に彼女の場の伏せカードがまた一枚翻る。

「おにーさんのエンドフェイズに永続罨発動、「ウィジャ盤」」

そのカードが光を放つと共に、彼女の場にアルファベットや記号の描かれた板と謎の手や器具が出現。その不気味な形に青年がまたも怯んだ。

「ウィジャ盤は靈魂との交信に使われる道具だね。幽霊さんがおにーさんに伝えたい事があるんだってさ」

彩葉の言葉と共に謎の手が動き出し、その器具が一つの文字——「D」を指し示す。同時に板——ウィジャ盤の上に「D」の文字を持つ靈魂が出現した。

「これだけじゃないよ？ おにーさんのこのエンドフェイズにウィジャ盤の効果発動。相手エンドフェイズに手札・デッキから、「死のメッセージ」カード一枚を「E」「A」「T」

「H」の順番で自分の魔法&罨ゾーンに出す」

「D、E、A、T、H……DEATH!？」

彩葉の話に青年がぎょつとした目で反応。彩葉がまたも冷たい笑みを浮かべる。

「そう。ウィジャ盤の効果により、このカードと「死のメッセージ」カード四種類が自分フィールドに揃った時、私はデュエルに勝利する。まずは「E」のカードだね」

彩葉はそう言い、彼女の言う通り「E」のカードを示す死のメッセージカードを青年に見せる。だがそれを見た青年が途端に得意気な笑みを見せた。

「ヒョヒョヒョ！ 死のメッセージカードは永続魔法！ だけどお前の魔法・罨ゾーンに空きはない！ どうにかしないと死のメッセージカードが置けないねえ！」

「んふふ。心配ありがとう、おにーさん……けど大丈夫だよ。ダーク・サンクチュアリの影響下にある限り、私は自分の「ウィジャ盤」の効果で「死のメッセージ」カードを出す場合、そのカードを攻撃力・守備力0で悪魔族・閥属性・レベル1の通常モンスターとして特殊召喚できる。」

さらにこの効果で特殊召喚した「死のメッセージ」カードはウィジャ盤以外のカードの効果を受けず、攻撃対象にされない。

そして、この効果が適用されたモンスターしか自分フィールドに存在しない状態での相手の攻撃は自分への直接攻撃になる」

「っ、攻撃対象にならず、俺のカード効果を受けないモンスターになるだっつて!？」

「死のメッセージ「E」を通常モンスターとして特殊召喚！」

死のメッセージ「E」 守備力：0

本来は永続魔法カードを置くことが許されないモンスターカードゾーンに死のメッセージカードが置かれ、「E」の文字を持つ靈魂が出現する。

「そして、私のターン。ドロー」

そして、既に青年のターンエンド宣言は終わっているため彩葉のターンへと移るのだった。

「——ターンエンド」

しかしそのまますぐにエンドを宣言。あつという間に青年のターンへと移る。

「くそ、あのガキのデッキは恐らくウイジャ盤の効果での特殊勝利を目指すデッキ……モンスターを出す必要もないって事か……」：俺のターン、ドロー！」

青年はデュエリストとしての癖か彩葉のデッキ内容を推測しながらカードをドロー。そのドローカードを見るとニヤリ、と笑みを見せた。

「ヒョーツヒョヒョヒョ！ いいカードを引いたぜ！ 手札を一枚捨て、フィールドの魔法・罠カードを二枚まで、ダーク・サンクチュアリとウイジャ盤を対象として速攻魔法「ツイントイスター」を発動！ そのカードを破壊する！」

突如二つの竜巻が発生、それによって不気味な瘴気や目玉達がかき消されていき、

ウイジャ盤も同じく竜巻に吹き壊されようとしたその時、まるで何かに阻まれたかのよう
に竜巻が防がれていた。

「な、なんだ!?!」

「永続罨「宮廷のしきたり」を発動したんだよ♪ このカードが魔法&罨ゾーンに存在する限り、「宮廷のしきたり」以外のお互いのフィールドの表側表示の永続罨カードは戦闘・効果では破壊されない。これでウイジャ盤は破壊されないね。残念でくした♡」

「ぐ、ぐぬぬ……だが、これでダーク・サンクチュアリの亡霊とやらは役に立たない。バトル! アルティメット・インセクトでダイレクトアタック!」

しかし彩葉への攻撃をランダムで無効化し、逆に青年にバーンダメージを与えるダーク・サンクチュアリの除去は完了、総攻撃のチャンスだと青年が指示すると共にアルティメット・インセクトが背中から羽を伸ばして飛び出した。

「E」の文字を持つ靈魂は防御に参加することは出来ず、ただ自分を飛び越えていく昆虫を見届けるのみ。

「そ、そんな……」

「これで終わりだあつ!!」

自分の防御が突破されたのがショックなのか、急降下攻撃をしてくるアルティメット・インセクトを呆然と見上げる彩葉と、勝利を確信して歓声に近い声を上げる青年。

「——なあんちゃって♡」

その時、彩葉がそう呟いた瞬間。アルティメット・インセクトがまるで見えない何かにぶつかつたように動きを止め、そのまま弾かれるように吹き飛ぶのだった。

「な、なにいつ!？」

「永続罠」「スピリットバリア」。自分フィールド上にモンスターが存在する限り、私への戦闘ダメージは0になる。「死のメッセージ」「E」はモンスター扱いになつてゐるからね。この効果を受ける範囲内だよ」

「そ、そんな……」

驚く青年に彩葉が、いつの間にか発動していたカードを指しながら得意満面に説明。その言葉に青年は歯噛みする。

スピリットバリアがある限り、彩葉の場にモンスターがいる限り戦闘ダメージを与えられない。しかし彼女の場に存在するモンスターは攻撃対象にならないため事実上の戦闘破壊耐性を持ち、さらには彼女のウィジャ盤以外の効果を一切受けない耐性を持つ。つまりそれを除去するだけでも一苦労という硬い防御力を誇つていた。

さらには彼女のデッキのキーカードであるウィジャ盤ともども宮廷のしきたりによつて守られており、これらを破壊するにはまず宮廷のしきたりから除去しなければならぬというこれまた強固な体制を取られていた。

(だ、だけどダーク・サンクチュアリが消えた以上、ウイジャ盤の効果で死のメッセージカードが置かれるのは魔法・罠ゾーン……)

青年がこれ以上死のメッセージがモンスター扱いで出てくる事はないはず、と考えていたその時。またも彩葉の場のカードが翻る。

「トラップ発動「メタバース」。デッキからフィールド魔法カード一枚を選び、手札に加えるか自分フィールドに発動する。二枚目のフィールド魔法「ダーク・サンクチュアリ」を発動するね」

「く……」

その言葉と共に再び場が瘴気に満たされ始めるが、この状況はそれだけではない。青年が悔しそうに「ターンエンド」と宣言すると同時、ウイジャ盤が動き出す。

「ウイジャ盤とダーク・サンクチュアリの効果により、「死のメッセージ「A」」を通常モンスターとして特殊召喚！」

死のメッセージ「A」 守備力：0

続けてモンスターゾーンに出現する「A」の文字を持つ靈魂。

このまま死のメッセージがモンスター扱いで並んでいけば強固な壁になると共に敗北のカウントダウンが刻まれていく。青年はギリリと歯ぎしりをしていた。

「私のターン、ドロロー。「成金ゴブリン」を発動。カードを一枚ドロローして、おにーさん

のライフが回復する。カードを一枚セットしてターンエンドだよ」

「ちつ——ドロー！」 LP 4700 ↓ 5700

そんな青年をよそに彩葉は淡々とカードをドローし、またも成金ゴブリンを使ってドローを加速した後に手札から一枚伏せてターンエンドを宣言。青年がイラついた様子で「ドロー！」と勢いよくドローをするが、そのドローカードを見ると喜色を見せた。

「馬の骨の対価」を発動！ 昆虫人間を墓地に送って二枚ドロー！ 続けて「闇の量産工場」を発動だ！ 墓地の通常モンスター二枚、「昆虫人間」二枚を手札に加える。そして「手札断殺」！ さつき手札に加えた昆虫人間二枚を墓地に送って二枚ドロー！」

「私も二枚捨てて二枚ドローするね」

怒涛のドロー・サルベージを駆使したコンボで、さつきまで無手札だった彼の手札が一気に二枚に増える。それを見てさらに青年の表情は喜色を深めた。

「ヒョーヒョヒョヒョー！ 速攻魔法「サイクロン」を発動！ 宮廷のしきたりを破壊するピョー！」

「くっ……」

得意満面の青年が魔法を発動すると共に放たれた竜巻が、彩葉の場の宮廷のしきたりを粉碎。通つたと見た青年はそこを逃さずさらに動き出す。

「俺は自分フィールド上の魔法・罠カード二枚、虫除けバリアーと伏せカードを墓地へ送

り、「オオアリクイクイアリ」を特殊召喚！

オオアリクイクイアリの効果発動！ このカードは攻撃をするかわりに相手フィールド上の魔法・罠カード一枚を破壊する事ができる！ ウィジャ盤を破壊しろ！」

オオアリクイクイアリ 攻撃力：2000

青年の場の二枚の魔法・罠カードが消え、オオアリクイさえ喰らいそうな程に巨大なアリアが出現。そいつは己の攻撃権を放棄する代わりとでもいうようにウィジャ盤目掛けて突進。その大顎でウィジャ盤を噛み砕いた。

「……ウィジャ盤がフィールドから離れた時、自分フィールドの「ウィジャ盤」及び「死のメッセージ」カードは全て墓地へ送られる……」

そして砕かれたウィジャ盤が消滅すると共に、彼女の場の靈魂も全て消滅。彼女の場ががら空きとなった。

「ヒョーツヒョツヒョツヒョ！ どうだ、これが大人の戦略なのさ！ モンスターが消えた今、スピリットバリアも無意味！ バトル！ アルティメット・インセクトでダイレクトアタックだ！」

青年の指示を受けたアルティメット・インセクトが飛び立ち、僅かに沈黙。しかしそのまま彩葉へと突進していくのを見て青年は笑みを浮かべた。

「勝った！」

「墓地の「超電磁タートル」を除外して効果発動！ このバトルフェイズを強制終了させる！」

しかしその直前、彼女の場に強力な磁力フィールドが発生。その磁力に弾かれたかのようにアルティメット・インセクトは青年の場に弾き飛ばされていった。

「ちいつ！ 俺はこれでターンエンド！ だがお前の要であるウィジャ盤は破壊した！ 次のターン、オオアリクイクイアリの効果でダーク・サンクチュアリを破壊すれば俺の勝利は決まったような——」

青年の啖呵が途中で止まる。それもそうだろう。

なにせ——彩葉の場にウィジャ盤が再び出現、さらにそのウィジャ盤の示す文字を示す靈魂が二つ、彼女の場に出現していたのだから。それはまさしく既視感デジャヴの如く。

そして彩葉が「きやは☆」と笑う。

「おにーさんのエンドフェイズにトラップカード「ブービートラップE」を発動したんだよ☆

手札を一枚捨てて、自分の手札・墓地の永続罠カード一枚を選んで自分フィールドにセットする。しかも、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる。

私はこの効果で墓地の永続罠「ウィジャ盤」をセットし、そのまま発動。その効果に

より「死のメッセージ「E」も、ダーク・サンクチュアリの効果で通常モンスター扱いで特殊召喚されたの」

死のメッセージ「E」 守備力：0

「だ、けどなんで「A」の文字まで……いや……」

彩葉の言葉に青年が反論しようとするも、そこで違うと気づく。

そう、彼女の場に存在するのはウィジャ盤そのものが示す「D」と死のメッセージ「E」、だがその次に彼女の場にいた死のメッセージは「H」を示していた。

その差異に青年が気づいたのを見計らったかのように、彩葉がまたにま、と微笑む。

「永続罨「死の宣告」。魔法&罨ゾーンのこのカードを墓地へ送る事で、自分の手札・デッキ・墓地から「死のメッセージ」カード一枚を選び、ウィジャ盤の効果扱いとして自分の魔法&罨ゾーンに出す事が出来る。これで私はデッキから「死のメッセージ「H」を、ダーク・サンクチュアリの効果で通常モンスター扱いで特殊召喚したんだよ♡」

死のメッセージ「H」 守備力：0

そこまで説明を終えた彩葉がにやあ、と意地悪く笑う。

「これでおにーさんのコンボは実質無駄に終わったね。まあ、破壊しなかつたらこのターンでウィジャ盤の効果と死の宣告の効果で終わってたから。ギリギリ耐えたとも言えるかなあ？」

「ぐ、ぐぬぬ……だが、俺の場にはオオアリクイクイアリがいる！ 次のターン、こいつを破壊できないきや結局次のターンもう一度ウィジャ盤を狙って今度こそ終わりだ！」

「んふふ、そうなるといーねえ♡」

結果的に勝利を逃したとはいえ、青年のコンボに対して一瞬で立て直したともいえる立ち回りに対して青年が喚き、彩葉はニヤニヤと笑いながらカードをドロ。そうしたかと思うとデュエルディスクの墓地ゾーンに手をやった。

「墓地の「ダーク・オカルティズム」を除外して効果発動。自分の手札・墓地の「ウィジャ盤」及び「死のメッセージ」カードの中から、任意の数だけ選び、好きな順番でデッキの一番下に戻して、その後戻した数だけ自分はデッキからドロする。」

私はさつき破壊された「E」と「A」、そして「T」の死のメッセージと「ウィジャ盤」をデッキボトムに戻して、四枚ドロ！」

「な、そんなカード……」

一気に四枚のドロを行い、手札は合計六枚。青年も何故そんなカードが墓地にと啞然とするが、自分がさつきまで手札断殺を使っていた事を思い出し、歯噛みする。その時に墓地に送られていたのだ。

「おまけに、「成金ゴブリン」を発動。またドロ&回復ね♡」

「……」LP5700↓6700

手札に來たらしい最後の成金ゴブリンをついでにと発動してドローを加速し、青年のライフがまた回復する。これで三枚目というのもあるか青年はもはや眉一つ動かさなかつた。

「次に魔法カード「死者への手向け」を発動。手札を一枚捨てて、オオアリクイクイアリを破壊するね」

「うげっ!？」

だがその次に発動したカードには流石に声を上げてしまふ。しかしもう遅く、発動した魔法カードから伸びた包帯がオオアリクイクイアリをぐるぐる巻きにしてしまふとカードの中に引きずり込み、オオアリクイクイアリは魔法カード諸共消滅していった。

「く、くそ！　だが、大樹海の効果発動！　フィールド上に表側表示で存在する昆虫族モンスターが戦闘またはカードの効果によつて破壊され墓地へ送られた時、そのモンスターのコントローラーは破壊されたモンスターと同じレベルの昆虫族モンスター1体をデッキから手札に加える事ができる！　オオアリクイクイアリのレベルは5！　俺は「昆虫機甲鎧」を手札に加える！」

「むいふいふ……」

オオアリクイクイアリこそ破壊されるが辛うじて後続のサーチに成功。しかし彩葉はニヤニヤと笑みを見せ続けていた。

「魔法カード「ブーギートラップ」を発動するね。手札を二枚捨て、自分の墓地の罠カード一枚を対象としてそのカードを自分フィールドにセット。さらにこの効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる……一応言っておくけど、永続罠だって罠カードだからね？」

「っ!？」

「——私は墓地から永続罠「死の宣告」をセットするね♪　そして、最後に一枚伏せて。ターンエンド♡」

彩葉は手札を全て使い切ってターンエンドを宣言するも、対峙する青年の顔は青い。

この青年のエンドフェイズにウイジャ盤の効果で次の死のメッセージである「A」が刻まれると同時に市の宣告によって死のメッセージ「T」が刻まれた瞬間、ウイジャ盤の特殊勝利条件が満たされる。

即ち、このターンで彼女のライフをゼロにするなりして勝利するかウイジャ盤を攻略しなければ彼の負けが確定する。さっきのターン、オオアリクイクイアリによってなんとかしのいだ敗北へのカウントダウンを再び突きつけられてしまった。

「お、俺のターン、ドロロー!!」

対する青年の手札はさっきのターンにサーチした昆虫機甲鎧とこのドロローフェイズにドロローした二枚のみ。しかし青年は必死に知恵を巡らせ、その中でこの状況を打破で

きる可能性に思い至る。

「俺は魔法カード「孵化」を、昆虫人間を生贄に捧げて発動！ 生贄に捧げたモンスターよりレベルが一つ高い昆虫族モンスター一体をデッキから特殊召喚する！ 昆虫人間のレベルは2！ よってレベル3の昆虫族モンスターがデッキから孵化する！」

まずはドローカードを使い、頭に描いた逆転の一手の一步を踏み出す。

（俺のデッキにはレベル3の「ジャイアント・メサイア」がいる！ こいつを出してアルティメット・インセクトかジャイアント・メサイアのどちらかの攻撃がダーク・サンクチュアリで無効にされなければ、ジャイアント・メサイアの効果でウィジャ盤が破壊できる！ そうすればまだ俺に勝機は——）

50%の確率で攻撃が無効にされるダーク・サンクチュア리를潜り抜ける必要があるとはいえ、これに成功すれば再びウィジャ盤を破壊し、圧倒的有利になる。勝つにはこれしかないと言青年は狙う。

「孵化の発動にチェーンして、ライフを半分支払ってリバース・トラップ発動」LP30
00↓1500

「——え？」

だが、それを遮るように彩葉の声が響き渡る。

「[神の宣告]。魔法・罫カードが発動した時、その発動を無効にし破壊する。孵化の発動

を無効にして破壊するね♪ おにーさん、残念でしたー♡」

「な……」

彩葉の場に現れた神のような威厳溢れる老人が一喝すると共に、青年の場の魔法カードが力を失って粉碎される。

「ああああああつ!!!」

同時、ライフを支払った事すらも電撃の対象になるのか。衝撃増幅装置から電撃が流れて彼女の身体を傷つけていく。しかしその悲鳴を上げる彩葉の表情はどこか楽しげだった。

「……っ」

そして対する青年は顔が青くなる。これで彼の場に残っているカードはアルティメット・インセクトLV7と大樹海のみ。伏せカードはなく、手札も場の昆虫族に手札から装備して装備モンスターのステータスを上げる効果を持つ昆虫機甲鎧のみ。

彩葉の場にモンスターと化した死のメッセージとスピリットバリアがある以上、単純に攻撃を仕掛けてダーク・サンクチュアリを潜り抜けたとしてもダメージを与える事は出来ない。

つまり——彼は万策尽きていた。

ズズズ……

万策尽き、凍りついたように動かないまま無為の時間を過ごす青年をよそに、ウィジャ盤が動き出す。時間切れによって強制的にターンプレイヤーのエンドフェイズへと移行したのだ。

そしてウィジャ盤が「A」の文字を指し示すと同時、彩葉の場に「A」の文字を持つ靈魂が出現。同時に彼女の場の永続罨カードが翻った。

「ウィジャ盤とダーク・サンクチュアリの効果により、「死のメッセージ「A」」を通常モンスター扱いで特殊召喚。そして永続罨「死の宣告」を発動し、これを墓地に送って効果発動。魔法&罨ゾーンのこのカードを墓地へ送って、自分の手札・デッキ・墓地から「死のメッセージ」カード一枚を選び、ウィジャ盤の効果扱いとして自分の魔法&罨ゾーンに出す」

死のメッセージ「A」 守備力：0

「あ、あ……」

再び、ウィジャ盤が動き出す。青年が震える声を漏らすが、それでウィジャ盤が止まる事はなく、

「死のメッセージ「T」」をダーク・サンクチュアリの効果により、通常モンスター扱い

で特殊召喚♪」

死のメッセージ「T」 守備力：0

「T」の文字を持つ靈魂が彩葉の場に出現。

同時、「D」、「E」、「A」、「T」、「H」。それぞれの文字を持つ靈魂が浮遊し、整列。

DEATH

青年に「DEATH^死」の宣告を突きつけた。

「そ、そんな……あり得ない、俺はプロデュエリストなんだ……昔は全国大会で優勝もしたことがある……その俺が、こんなガキに負けるなんて、そんな、そんなわけ……」

魂が抜けたように呆然とへたり込み、現実を認めたくないように俯いてぶつぶつと呟く青年に対し、彩葉はニヤニヤと笑っていた。

「あ、そーそーおにーさん。一つ大事な事を言い忘れてたんだー♪ 聞こえるー?」

「え……?」

大事な事、そう言われた青年が顔を上げる。彩葉が「にやは♡」と笑みを浮かべる。黒

猫を模したパーカーのフードを被って猫耳を模したパーツがピンと立ち、こてんと首を傾げている格好がとても愛らしいそれはしかし青年にとつて、これから死の宣告を与える死神のように見えた。

「この特別ルールだね。デツキ破壊とか特殊勝利とか、ライフが0にならない手段で敗北した相手のライフポイントはね……一気に0になるダメージが入ったとみなされるんだ♡」

「……っ!!」

彩葉の言葉を聞いた青年が、全てを察して絶句。慌てて自分の左腕のデュエルディスプレイを確認する。

そこに示されている彼のこのデュエル中の最終ライフは6700。これが一気に0になったとみなされるダメージ、つまり、6700のダメージを受けたとみなされ、衝撃増幅装置が作動する事になる。

「ま、待て！ 待ってくれ!! や、やめてくれえ!!」

もはや恥も外聞もなく泣き叫ぶ。このデュエルで彼が受けたダメージはアルティメット・インセクトLV7の攻撃がダーク・サンクチュアリで跳ね返された1300のみ。単純に言つてそのダメージの五倍の衝撃・苦痛がこれから味わわれるというわけだ。

「おにーさん♪」

それに対し、彩葉はにこつと可愛らしく微笑む。

「本日のホントのメイスイイベント、開始だよ♡」

そして、その可愛らしい微笑みが見下すような視線と嘲るような笑みへと変化するのと、青年のデュエルディスクのライフポイントゲージが急速に減少していくのは同時だった。

LP6700↓0

そしてそのライフポイントゲージが0を示すと同時、

「ぎやあああああああつ!!!」

衝撃増幅装置から強烈な電撃が流れ、それを抵抗も出来ずに浴びる青年の痛々しい悲鳴が響き渡るのだった。

床に倒れてのたうち回り、なんとか装置の一つである首輪を外そうと躍起になつて首輪を両手で掴み外そうとするも失敗、まるで地面に打ち上げられた魚のようにのたうち回りながら痛々しい悲鳴を上げる青年の姿を彩葉はクスクスと冷たく笑いながら見守り、それを見物する観客も面白い見世物を見ているかのように笑い続けていた。

「あ………が………」

そして電流が止んだ時、青年は身体をビクビクと痙攣させながら、痛みに耐えきれな

かったのか白目を剥いて気絶。

牢屋に入ってきた黒服の屈強な男達が気絶した彼を乱暴に抱えあげると、彩葉は青年の元に歩み寄り、そつと耳打ちした。

「おにーさん。楽しかったよ♡ また遊ぼうね♡……借金を返済した後で、まだ命があつたらだけど♪ きゃは♡」

気絶している青年に聞こえているか分からないが、まるで深層意識に刷り込もうとでもしているかのように彩葉は囁く。

このデュエル、実は青年は「自分の借金を返せるだけの大金を自分の勝利に賭けて」デュエルしており、デュエル前に瘦躯の男性が言っていた言葉は「勝てば借金をチャラに出来るだけのお金が賭けの結果として手に入る」というだけの意味。しかし結果は敗北、その負け分だけ逆に青年の借金は増えたのだった。

彩葉が囁き終わると共に青年は屈強な男性に運ばれていく。彼が今からどこに行くのか、どんな地獄を味わうのか。彼女は知らないし興味もない。

彩葉はくるりつと観客達の方を振り返るとにぱつと明るい微笑みを見せる。その笑顔はさつきまで一人の人間を陥れ、苦痛を味わわせ、その人生を実質的に終わらせた事に愉悦を感じていたとは思えないほどの純粹なものだった。

「みんなー☆ 楽しんでくれたー?」

まるでアイドルのように振る舞う彩葉の姿に観客達は熱狂。その姿に彩葉はむふふと微笑んで手を振り、

「次も皆を楽しませてあげることから、応援よろしくねー♪ じゃ、まったねー♡」
媚を売るようにそう言い残して無邪気に去っていく。

デュエル界の闇である地下デュエル場に咲く一輪の花のように可憐であり、それでいて綺麗なバラには刺があるという格言通りの残酷性を併せ持つ少女の姿に、観客達は再び熱狂するのだった。

強欲デュエリストに負けちやうメスガキデュエリストの 話

「彩葉さん、貴女に地下デュエルの特別オフアアが届いております」

スーツにシルクハット姿の瘦躯の男性の言葉に、真つ白なふわふわベッドに寝転がっている少女——柳里彩葉は面倒そうに「ごろんと転がりながら、まさしく猫のように丸くなって瘦躯の男性——自分の地下デュエルにおけるマネージャーであるモンキー猿山を気だるげな猫目で一瞥する。

「めんどい」

「……これは運営からの直々のオフアアとなっております。その意味が分かりますね？」

「……」

一刀両断する彩葉だが眉一つ動かさず薄い笑みを浮かべている猿山の言葉を受けて露骨に嫌そうな顔をする。

現在彩葉が居るこの部屋、高級ホテルを思わせる贅沢な家具が用意された上等な部屋は彩葉が地下デュエルで勝った賞金を元に借りている、地下デュエル内では最上級とい

える部屋。下級ともなるともはや牢獄のような部屋に所狭しと押し込められている事も珍しくない中、そんな高級な部屋を独り占め出来るのは地下デュエルで勝ち進み、金を稼いでいる者の特権。

しかしその部屋含めて地下デュエルを運営している者に目をつけられたり機嫌を損ねたりすれば権力でこの部屋の使用権を奪われてもおかしくはない。それほどまでに運営というのは地下デュエルの中では絶対的な支配者だった。

「……相手は誰？」

ベッドに寝ころんだまま、しかし諦めたように促す彩葉に「そう言っていただけだと思います」と薄い笑みのまま答える猿山。そして彼はぺらりと資料をめくりあげた。

「お相手も貴女と同じく地下デュエルのデュエリストです。ですが、趣味でギャンブルをしていて負けが込み、借金を重ね、デスマッチデュエルでも最近戦績が振るわず。ついに後がなくなって逃げ出しました。無論、すぐに捕まりましたがね」

「えー、そういう奴の制裁って犬飼のおじさん担当じゃないのー？」

「彼には見所のあるプロの落ちこぼれを相手してもらおう予定でしてね……カイザー亮、と言いましたかな？」

「あつそ……で、そいつにデスマッチデュエルでトドメを刺せばいいの？」

猿山の説明に彩葉は「ごろ」と転がりながらあつさりと「殺す」という旨の言葉を口

にする。しかし猿山は「ノンノン」と人差し指を振ってそれを否定した。

「もちろんそれも簡単でしょう。ですが、ギャラリー観客は常に新たな刺激を求めております。ここで今回、一つの特別なルールでのデュエルをご用意しました。貴女もやろうと思えば大金が手に入りますよ？」

猿山の酷薄な笑み。それを見た彩葉も「きやは♡」と興味を示したように笑いを返すのだった。

「レディースエンドジエントルメン!!! さあ、今宵のメインイベントを開始するぜえ!!!」

さて、場所は非合法的な地下デュエルの会場へと移る。

そこに立つのは黒猫を思わせる黒いネコミミパーカーがトレードマークな猫目の小柄な少女——彩葉。その目の前には大柄で筋肉質な男が目を血走らせて彩葉を睨みつけていた。

まるで美女と野獣のようなその光景を包むのは一応空気穴が天井に設けられているもののそこ以外は強化ガラスによって完全に密閉されていると思われる透明な部屋。一応出入り口だけは強化ガラスではないが、そこもそこで鉄製のドアになっており、閉

じ込められれば脱出は不可能なのが伺えるものだった。

そして彩葉とその対戦相手は向かい合っているものの、透明な部屋自体はそれぞれ一人一つずつ独立しており、二人が向かい合うように立てばちようどいい位置にテーブルデュエル用の端末が設置されている。

普段はコロシウムか何かを思わせる牢屋のような金網に囲まれてデュエルしている彩葉は珍しい趣向の部屋をふうんと興味津々に見回し、部屋の外を見る。そこだけはいつもと変わらず、仮面で顔を隠した観客が自分達を見守っており、彼らのざわめきは部屋に付けられているスピーカーを通して彩葉に届いており、さらに見ると部屋にはマイクが取り付けられているため自分達の声もそこから外にスピーカーを通して届くようになっていているのだろうと彩葉は推測していた。

「今回のデスデュエルはヘルキャット彩葉VSブラッドブル潮^{うしお}！ 地下デュエリスト同士のデュエルだ！ そして今回は普段のデスデュエルに加え、新たなルールをご用意したぜ！」

司会者がそう言って観客を煽り、同時に用意されているモニターにでかか文字が表示される。

「ライフを奪いあえ！ グリッドデュエル！」

モニターに表示された文字に観客がざわざわと困惑した声を出したりする。

「今回のデュエルは特別製！ デュエリスト両者のライフポイントが共有される仕組みだぜ！ もつとも。それにデュエルディスクのシステムを弄るのは無理だったから、グリードデュエル用にシステムを構築したテーブルデュエル用の端末を使用してもらうぜ！」

本来デュエルモンスターズにおいてライフポイントとは文字通りデュエリストの命ライフ。これを失う事は即ち敗北であり、それが共有される。という事に観客が再びざわめきだす。

「困惑もごもつとも。しかし今回のデュエルにおいてライフポイントとは命ではない。そう、ライフポイントをマネーポイントとでも言い換えよう！」

司会者はそう言つて熱狂しつつも冷静にルールを説明していく。

今回のデュエルは先程言つた通りライフポイントは両者共有、さらに20000ポイントからのスタート。

互いのデュエリストは通常通りのデュエルを行い、ライフポイントにダメージを与えた場合、その与えたダメージ分自分にMマネーポイント Pが加算される。そしてライフポイントがゼロになる、もしくはどちらかのデッキが尽きてドロウ出来なくなった時、あるいは特殊勝利の条件が満たされる等でデュエルの決着がついた時。その時点で所有していたM P分の賞金が手に入るといふ仕組みである。

つまり20000のライフポイントを奪い合うというのは、このライフポイントをいかにして自分のマネーポイントにするか。という事である。

「ちなみにライフを支払う、または失うなど、ダメージ以外によるライフポイントの減少はマネーポイントへの加算とは認められない。また回復をした場合にマネーポイントが減るなんてケチな事はねえから安心しな！」

そしてこのグリードデュエル、マネーポイント一ポイントにつき500円に変換！
全てのポイントを独り占めにすれば一千万円だ！」

その言葉に観客が「ほお」と控えめに声を出し、ブラッドブル潮なる男性も歓声を張り上げる。

「もちろん演出だつて気合いを入れてるぜ！ モニターをご覧あれ！」

司会者の言葉と共にモニターの映像が移り変わる。

現在彩葉達が入っている透明な部屋と同じものがモニターに映っている。いや、その部屋の上には額に「100」と書かれたメーターの貼りついた「強欲な壺」が置いてある。と思ったその時、二人の部屋それぞれの上にも強欲な壺が仰々しい機械音を立てながら降りてくる。どうやらここまで含めて演出らしい。

そしてモニターの中の強欲な壺が傾き、裏返つて天井を完全に塞ぐような形でくつくと共に壺の中から金貨が部屋の中へと降り始め、同時に強欲な壺の額のメーターも

「99」「98」とカウントが進んでいく。どうやら金貨はソリッドビジョンらしく、地面に落ちると同時に消滅するも部屋を埋め尽くさんとばかりに降り注ぐ金貨の雨に観客達は面白そうに笑い、潮は画面を見ながら再び歓声を上げ、彩葉は「ふうん」と眩きながら画面の推移を見守る。

そして20秒ほどでメーターのカウントが「0」を示すと同時に金貨の放出も終了。傾いていた強欲な壺は立ち直して沈黙した。

「これはちよつと地味なライフで勝利した場合のデモンストレーションだ！ もちろん20000ポイントで勝利した場合はこんなもんじゃないぜ!!」そしてマネーポイントを全て受け取らないとこの部屋からは出られないから注意してくれよな!」

「当然だ! 金も貰わずにさよならなんて出来つかよ!!」

司会者の念を押すような言葉に潮が声を上げる。気合充分な様子が伺え、司会者はうんうんと頷いていた。

「そして言うまでもないが、こいつはいつものデスマッチデュエルに付加した特別ルールだ。衝撃増幅装置の電撃にも注意しな! さあ、グリードデュエルの説明はここまでだ。ここからは二人のデュエリストの壮絶なライフの奪い合いを^金ご覧あれ!」

説明を終え、司会者がそう宣言すると同時、二人はテーブルデュエルの端末前に立つてデッキを端末にセット。

「デュエル!!!」

「イツァ、ショータイム!!!」

そして二人の掛け声とグリードデュエルなる地下デュエルの開始を宣言する実況の
声が重なり合った。

「先攻は俺様だ! ドロー!!」

先攻を取ってカードをドローするのは潮。彼は六枚の手札を見てニヤリと笑う。

「俺はモンスターをセットし、カードを四枚セットしてターンエンドだ!」

「私のターン、ドロー♪」

合計五枚のカードセット、入念に仕掛けた様子の潮に対して彩葉はニヤニヤ笑いをし
ながらカードをドローする。

「私は「ツインバレル・ドラゴン」を召喚して、効果発動♪ このカードが召喚・反転召
喚・特殊召喚に成功した時に相手フィールド上に存在するカード一枚を選択して発動
し、コイントスを二回行って二回とも表だった場合、選択したカードを破壊するよ。狙
いはそうだね、そのモンスターでいつか♡」

ツインバレル・ドラゴン 攻撃力：1700

彩葉の場に現れた、頭部が銃で出来ている機械龍の後ろに二つのコインが出現し、機
械龍が狙いを定める。そしてコインが弾かれたように上空を飛び、落下。そのコインは

それぞれ「表」「裏」を示していた。

「ちえ、残念。じゃありバースカードを三枚セットして、守備モンスターに攻撃！」

効果は失敗、なら普通に攻撃と攻撃を指示。同時にツインバレル・ドラゴンが放った弾丸が潮の場のモンスターを撃ち抜き、壺の中からぎよろりと目玉を覗かせるモンスターが姿を現した。

「へへへ。「メタモルポット」の効果発動だ！ 互いのプレイヤーは手札を全て捨て、デッキから五枚ドロローする！」

「そんなところだろうと思った。ありがとうございまーす♪」

一気に手札交換及び大量ドロローを行える強力モンスターの姿に、しかし潮のプレイヤーから想定していた彩葉は笑顔でお礼を応える。その時、潮が「だが！」と声を上げた。「メタモルポットの効果発動にチェーンして永続罫発動「グリード」！ カードの効果でドロローを行ったプレイヤーは、そのターンのエンドフェイズ終了時にカードの効果でドロローしたカードの枚数×500ポイントダメージを受ける！」

さらにチェーンして永続罫「神の恵み」も発動！ このカードが魔法&罫ゾーンに存在する限り、俺はカードをドロローする度に、500LP回復する！

そしてメタモルポットの効果により、互いに手札を全て捨てて五枚ドロローだ！ そして神の恵みの効果により、ライフを500回復する！」LP200000↓20500

「……ぷん」

潮は効果によってドロウすることにダメージを受けるカードを発動。それを見た彩葉は訳知り顔でニヤニヤ笑みを浮かべながら、メタモルポットの効果による手札交換処理を行い、新たな五枚の手札を見る。

「……じゃ、私はターンエンドでいいよ」

「ひゃつはあ！ エンドフェイズにグリードの効果発動だ！ 俺は五枚ドロウし、お前も五枚ドロウしている。よって互いに2500のダメージだ！ ひゃつはあああああつ!!」LP20500↓18000

「ああああああつ！」LP18000↓15500

グリード^{強欲}の報いとして二人のライフポイントにダメージ。それが衝撃増幅装置によつて電撃として二人のデュエリストへと襲い掛かった。

「そして！ このライフダメージは俺のグリードによる効果！ よつてマネーポイントは全て俺のものだ！ そうだな!」MP0↓5000

潮はそう雄叫びを上げる勢いで叫び、このデュエルの審判も兼任する司会者を睨むように見る。それに対して司会者は「その通り！」と潮の主張を肯定し、同時に彼の部屋天井に置かれている強欲な壺の額のメーターが上昇、「5000」を示す。

そして当初の説明通り一ポイントにつき五百円に変換される。この時点で彼はこの

デュエル終了後、無事にマネーポイントを受け取る事が出来れば二百五十万円が手に入るわけだ。

「俺のターン、ドロー！ 神の恵みの効果でライフ回復！ そしてリバース・マジック発動「墓穴の道連れ」！ お互いは、それぞれ相手の手札を確認し、その中からカードを一枚選んで捨てる。その後、お互いはそれぞれデッキから一枚ドローする！」

俺の手札は「手札断殺」、「闇の仮面」、「デス・コアラ」、「プレゼントカード」、「手札抹殺」、「魔宮の賄賂」だ！」 LP15500↓16000

「……魔宮の賄賂を捨てて。私の手札は「BM-4ボムスパイダー」、「トランスターン」、「アイアンドロー」、「リボルバー・ドラゴン」、「融合」だよ」

「ならBM-4ボムスパイダーだ。そして墓穴の道連れの効果により、互いにドローする。当然神の恵みの効果でライフを回復する」 LP16000↓16500

「うん、ドロー」

互いに相手の指定したカードを墓地へと捨て、新たなカードをドロー。その時潮の場のカードがもう一枚翻った。

「この瞬間、永続罫「便乗」を発動だ！ 相手がドローフェイズ以外でカードをドローした時に発動する事ができ、その後、相手がドローフェイズ以外でカードをドローする度に、自分のデッキからカードを二枚ドローする！」

ピーピングや手札破壊ではなくこの発動が目的だったのだろう。潮はさらにリバースカードを一枚伏せると手札の魔法カードを発動する。

「魔法カード「手札抹殺」！ 互いのプレイヤーは手札を全て捨て、その枚数分ドロウする！ 俺の手札は残り四枚、これを全て捨てて四枚ドロウだ！ 神の恵みの効果で回復！」 LP16500↓17000

「私の手札は五枚だから、五枚捨てて五枚ドロウするね」

「さらに！ 俺は便乗の効果で二枚ドロウだ！ 回復ウ！」 LP17000↓17500

さらにお互い手札を一気に交換。そして潮は最後にモンスターとリバースカードを一枚ずるセットしてエンドフェイズへの移行を宣言する。

「グリードの効果！ 俺はこのターン墓穴の道連れで一枚、手札抹殺で四枚、便乗で二枚。合計七枚ドロウしている！ よって3500のダメージだあ!!」 LP17500↓14000

「私は墓穴の道連れで一枚、手札抹殺で五枚。合計六枚ドロウだから3000ダメージ……ああああああつ！」 LP14000↓11000

そしてグリードの効果により互いに欲望の報いが電撃という形で襲い掛かる。もつとも彩葉はほぼ完全に潮の欲望に巻き込まれる形なのだが。

「へ、へへへ……この痛みも後で大金をいただくためだと思えば苦でもねえ……」MP5
000↓11500

「私のターン、ドロロー」

そして潮は激痛とこの後の楽しみが入り混じったような不気味な笑みを浮かべながら、メーターに「11500」と記された強欲な壺を見上げている。それをどこか憐れんだような目で見ながら彩葉は「私のターン」と宣言し、カードをドロローする。

「え？」LP11000↓14000

その時、彼女のライフが、いや今回のルールでいえば共有となっているライフが唐突に回復する。それに彩葉が流石に驚いた顔を見せるが、続けて潮の場のカードが一枚翻っているのに気づき、潮がニヤアと笑みを見せる。

「トランプカード「ギフトカード」！相手のライフを3000ポイント回復する。今回のルールでは共有だから俺のライフも同時回復みたいなもんだがな」

「ふくん。ま、いいや。ありがとね、おじさん♡ドローフエイズ終了だよ♪」

「ひゃつはあ！ならスタンバイフェイズにリバースカードオープン！「手札断殺」！

お互いのプレイヤーは手札を二枚墓地へ送り、その後それぞれデッキから二枚ドロローするー！」

「むう……」

「そしてお前がドローフエイズ以外にドロートした事で、俺はさらに二枚ドロード！ そして手札断殺と便乗、それぞれでドロートした事により神の恵みの効果で合計ライフを1000回復する！」LP11000↓12000

二人合わせて合計六枚ドロード。つまりグリードの効果による3000ダメージが確定する。そしてそれはさらに彼にMPが3000加算されるという意味だ。そしてシモツチによる副作用などのコンボを利用するわけでもないギフトカードの単体使用。彩葉が眉を顰めると、潮は自慢げに笑みを浮かべた。

「運営関係に俺のファンがいてなあ。この特別ルール、俺は先に教えてもらっていたんだ。ライフの回復でMPは減少しねえ。つまりギフトカードも文字通り百五十万円のギフトカードに早変わりって事だ！」

「なるほどね〜……まあいいや。メインフェイズに入るよ」

ライフ回復カードを兼用する事で少しでもMPを稼ごうという魂胆なのだろう。

自慢げに笑う潮に対し、彩葉はニヤつきながら次に動く。

「魔法カード「死者蘇生」を発動！ 墓地の「リボルバー・ドラゴン」を特殊召喚して、リボルバー・ドラゴンの効果発動！ 一ターンに一度、相手フィールドのモンスター一体を対象としてコイントスを三回行い、その内二回以上が表だった場合そのモンスターを破壊する！」

新たな機械龍が出現と同時に潮の場の守備モンスターに狙いを定め、その後ろの出現した三つのコインが弾かれたように上空を飛び、落下。そのコインはそれぞれ「表」「裏」を示していた。

「あちゃあ、残念……じゃ、普通に攻撃いくよ！ リボルバー・ドラゴンで守備モンスターを攻撃！」

効果破壊こそ失敗したものの、ならばとリボルバー・ドラゴンは守備モンスター目掛けて通常の射撃攻撃を開始。それを受けた守備モンスター——スケルエンジェルは無抵抗に破壊される。

「クク、スケルエンジェルのリバース効果発動！ 俺はデッキから一枚ドロウする！」LP12000→12500

「じゃ、ツインバレル・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「ひやは、それくらいならくれてやるぜ！」LP12500→10800

「そして与えたダメージ分、私のMPに追加されるつと。あとは一応リバース・永続魔法「機構部隊の最前線」を発動して、リバースカードを一枚セットしてエンドフェイズに入るね」MP0→1700

「この瞬間グライドの効果！ 俺はこのターン五枚ドロウした！ よってダメージは2500だ！ ああああああつ！」LP10800→8300

「私は二枚、10000ダメージだね……くうっ！」 LP 8300 ↓ 7300

「そして合計35000ポイントが俺のMPに追加ア！」 MP 11500 ↓ 15000

これで潮のMPは15000。七百五十万円がデュエル終了後、無事にマネーポイントを受け取る事が出来れば手に入るわけだ。

そう考えている潮はもはや電撃の痛みなんてなんのそのと言わんばかりの血走った目に欲望の笑みを湛えながら「俺のターン！」と猛々しく宣言してカードをドロウする。「魔法カード「浅すぎた墓穴」を発動！ 互いのプレイヤーはそれぞれの墓地のモンスター―一体を選択し、それぞれのフィールド上に裏側守備表示でセットする！ 俺は「メタモルポット」をセットだ！」 LP 7300 ↓ 7800

メタモルポット 守備力：600（裏側守備表示）

「なら私は「BM―4ボムスパイダー」をセットするね♪ ありがとー♪」

BM―4ボムスパイダー 守備力：2200（裏側守備表示）

潮と彩葉の場に一体ずつモンスターが墓地からセットされる。

しかしこのターンに特殊召喚したメタモルポットの表示形式は変更できず、そのリバース効果は発動できない。だがそんな事は分かっているとばかりに、潮はさらなる手を取った。

「魔法カード「太陽の書」を発動！ メタモルポットを表側守備表示に変更し、リバース

効果発動だ！ 互いのプレイヤーは手札を全て捨て、新たに五枚ドローする！ そして、お前がドローフェイズ以外でドローする事により、俺は便乗の効果でさらに二枚ドローできる！」LP7800↓8300↓8800

メタモルポット 守備力：600（裏側守備表示）↓攻撃力：700

「オツケー。ドローするね」

派手にドローを繰り返し、一気に手札を七枚に増やす潮。その手札を見た彼はニヤリと笑い、さらに動くように手札の一枚を魔法・罠ゾーンに差し込んだ。

「速攻魔法「皆既日食の書」を発動！ フィールドの表側表示モンスターを全て裏側守備表示にする。そしてこのターンのエンドフェイズに、相手フィールドの裏側守備表示モンスターを全て表側守備表示にし、その後、この効果で表側守備表示にしたモンスターの数だけ相手はデッキからドローする！」

メタモルポット 攻撃力：700↓守備力：600（裏側守備表示）

「く……」

「リバーズカードを二枚セットしてエンドフェイズ！ 皆既日食の書のさらなる効果発動！ 相手フィールドの裏側守備表示モンスターを全て表側守備表示にし、その後、この効果で表側守備表示にしたモンスターの数だけ相手はデッキからドローする！」

「表側表示になったモンスターは三体。三枚ドローするね」

ツインバレル・ドラゴン 守備力：200（裏側守備表示）↓守備力：200

リボルバー・ドラゴン 守備力：2200（裏側守備表示）↓守備力：2200

BM-4ボムスパイダー 守備力：2200（裏側守備表示）↓守備力：2200

「そしてグリードの効果発動だ！俺がこのターンドロウしたカードは7枚！よつて

3500ポイントのダメージを受ける！ハハハハハッ！！」LP7800↓4300

「私は8枚、よつて受けるのは4000ダメージ……きゃああああつ！！」LP4300

↓300

「そして合計7500ポイントがMPに追加されるウー！MP15000↓22500

普段のデスマッチデュエルならばノーダメージのところからでも即死になる4000のダメージ。その電流に彩葉は痛々しい悲鳴を上げており、それを観客は主に愉悦を、彼女のファンだろう観客は愉悦の中に僅かに心配そうな表情を見せつつ見守っていた。

「あ、く……私のターン、ドロ……う……」

「ハハハ！どうしたヘルキャット!?まだくたばつてくれるなよ？せつかくなん

だ、もつと稼がねえとなあ！」

電撃のダメージにふらつく彩葉を嘲笑う潮。彼も同じ電撃を受けているはずなのに、もはやこの後大金が手に入るといふ欲望で電撃のダメージを耐えているとしか思え

ないほどの頑丈さをみせつけていた。

「でも、もう残りライフ……300……これでどれだけ稼ぐって……え？」

息も絶え絶えに指摘する彩葉だが、その時デュエルテーブルのライフメーターが変動する。一気にそのライフポイントが8000にまで回復したのだ。そして、潮の場で一枚のカードが翻っている事に気づく。

「トラップカード「ヒロイック・ギフト」。相手のライフポイントが2000以下の場合に発動でき、相手のライフポイントを8000にして自分のデッキからカードを二枚ドロースる。これでまだまだ稼げるぜ？」LP300↓8000↓8500

「……んふ。ありがとね、おじさん♡ 私の手札は八枚、これだけあればその8000のライフを一気に削って、私も大儲け——」

「そうはいかねえんだなあ！ もう一枚リバースカードオープン、「大暴落」！ 相手の手札が八枚以上ある時に発動する事ができ、相手は手札を全てデッキに加えてシャッフルした後、カードを二枚ドロースる!!」

「——な……!?!」

メタモルポットと皆既日食の書での大量ドロへの対策も織り込み済み。といわんばかりのコンボにより、八枚もあつた彩葉の手札は一気に二枚へと減少。

さらに彩葉がドロースした事によつて潮は便乗の効果でさらに二枚ドロースを追加。し

かもこのドローによりグリードの効果によるダメージも確定した。

「ハハハ！ どうだ、もう万策尽きたか!？」 LP8500↓9000

「なら——トランプ発動「ギャンブル」！ 相手の手札が六枚以上、自分の手札が二枚以下の場合に発動する事ができ、コイントスを一回行い裏表を当てる。当たった場合、自分の手札が五枚になるようにデッキからカードをドローする。ただしハズレの場合、次の自分のターンをスキップする！」

現在潮の手札はヒロイック・ギフトと便乗のドローによる八枚、彩葉の手札は大暴落により二枚。

彩葉はそれを利用した一発逆転のギャンブルに出る。手札は潤沢と言えど場は裏側守備表示のメタモルポットのみで魔法・罠ゾーンにもカードはない。攻めるタイミングはここしかない、といわんばかりの彩葉の目の前にコインが出現。

「お願い——表！」

彩葉の宣言が響くと同時にコインは弾かれたように上空に飛び、くるくると回転しながら落下して地面に着地。その目は——裏を指していた。

「な……」

「はっははは！ 残念だったなあ！ ギャンブル失敗により、次のお前のターンはスキップされる！」

このままでは合計二ターンこっちは何も出来ないまま相手にターンが回される。そうなるてはまずいと彩葉は「リボルバー・ドラゴンの効果発動！」と宣言し、再びリボルバー・ドラゴンの後ろに出現した三つのコインが宙を舞う。

しかしその結果は先程と同じ「裏」「表」「裏」。またも効果失敗だった。

「ヒヤハハハハ！ 今日運が悪いなあヘルキャット！ さあ攻撃してみな！ メタモルポットの効果でドローして、さらに2500ダメージが追加されるがなあ！」

攻撃すれば手札は五枚に増える。だがそのターンで仕留められなければエンドフェイズに合計3500ポイントのダメージを受けてしまう。そんな状況を前に彩葉は固まってしまっていた。

「う……………うええええ……………」

そして彼女は突然へたり込むと泣き出してしまった。

「お願い……………お願い、 します……………もう、 痛いのだあ……………」

既に受けたダメージは10000を越している。普段のデスマッチデュエルならば二回はデュエルが終了しているようなダメージを一回のデュエルで立て続けに受けている、いくらそのデュエルに慣れていても限界が来るのだろう。

泣き出した彩葉に対し潮は愉悦を感じたような笑みを浮かべながら話しかける。

「それならそれなりのお願いの仕方ってのがあるよなあ？ ヘルキャット」

「……はい」

潮の言葉を受けた彩葉は既に心が折れているのか、へたり込んだ状態から両手を地面につけて頭を地面につけるくらいに下げる。所謂土下座の格好を潮に見せた。

「もう痛い嫌です……このデュエルが終わった後、なんでも言う事聞きます……だから、これ以上私にドロさせないで下さい……」

「ヒヤハハハハ！ いい格好だなヘルキャット！ いいだろう、そのままおとなしくターンエンドしな！ そのエンドフェイズに1000ダメージ受けるが、その程度はそのまま堪えろよ？」

「はい……ターンエンドです……あああああつ!!」 LP9000↓8000

「俺様のターン、ドロー！」 LP8000↓8500 MP22500↓23500

電撃が土下座している彩葉を容赦なく襲い、彩葉は土下座の態勢を維持したまま電撃の痛みに身体を震わせ、潮はその姿をどこか興奮したように見ながらカードをドロする。

「チツ、手札が悪いな。カードを二枚伏せてターンエンド。ギャンブル失敗によってメエのターンはスキップされる。文句はねえな？」

「はい……」

「俺様のターン、ドロー！」 LP8500↓9000

土下座してカタカタ震えている彩葉に高圧的に確認をした後、潮は再び己のターンを宣言してカードをドロ。そして何か思いついたようにニヤついた。

「俺は「メタモルポット」を反転召喚!!」

メタモルポット 守備力：600（裏側守備表示）↓攻撃力：700

「……え？」

突如彼の場に反転召喚されるメタモルポット。その言葉に彩葉がはつとしたように顔を上げるが、潮は嗜虐的に笑いながら「メタモルポットのリバーズ効果発動!」と宣言。

「互いのプレイヤーは手札を全て捨て、新たに五枚ドロする! おらヘルキヤット!

さつさと手札を全て捨てて五枚ドロしな!」

「ま、待つて……もう、ドロしたくない、つて……」

「ははは、何の事だろうなあ!?! おらさつさと進めやがれ!」

「ひっ……」

約束を反故にした潮だが、心が折れた状態で屈強な男に凄まれたら逆らえないのか彩葉は手札を全て捨てて新たにドロする。これで2500ダメージが確定。

「五枚ドロつと。そして便乗でさらに二枚ドロ……まだ終わらねえぞ! トラップ発動「攪乱作戦」! 相手は手札をデッキに加えてシャッフルした後、元の手札の数だ

「デッキからカードをドロウする！」 LP9000↓9500↓10000

「え……？」

「おらボーつとすんじゃねえ!!」

「は、はい……」

だが潮はさらに、今度は彩葉にのみドロウを強要するカードを使用。彩葉は再び手札を全て捨てて五枚ドロウした。

「さらに！ メタモルポットを生贄に捧げ、「ジャンク・コレクター」を召喚！ ジャンク・コレクターの効果！ フィールド上に表側表示で存在するこのカードと自分の墓地に存在する通常罫カード一枚をゲームから除外して発動し、このカードの効果は、この効果を発動するためにゲームから除外した通常罫カードの効果と同じになる！ 俺はジャンク・コレクターと墓地のプレゼントカードを除外して、攪乱作戦の効果をジャンク・コレクターの効果とする！」 LP10000↓10500

「あ、あ……」

その意味を理解し、恐怖したような表情で震える彩葉。しかしその処理は止まらず、彩葉も恐怖で頭が真っ白になっているがためか逆に身体が勝手に処理を行って手札を交換していた。

「こいつでトドメだ！ リバースカードオープン「トラップトリック」！ デッキからト

ラップトリック以外の通常罫カード一枚を除外し、その同名カード一枚をデッキから選んで自分フィールドにセットする。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる！

俺はデッキのプレゼントカードを除外し、同名カード「プレゼントカード」をセットし、発動！ 相手は手札を全て捨てて五枚ドロウする!! おら、俺様からのプレゼントだ！ 素直に受け取りやがれ!!」LP10500↓11000

「あ……」

「ケケケ」LP11000↓11500

五枚の手札が捨てられ、新たに五枚ドロウ。つまりこれだけで彩葉は二十枚カードをドロウした事になる。

「そしてエンドフェイズだ。グリードの効果発動。カードの効果でドロウを行ったプレイヤーは、そのターンのエンドフェイズ終了時にカードの効果でドロウしたカードの数×500ポイントダメージを受ける……つまり俺は13×500で6500のダメージを受けちゃうがヘルキャット、お前には20×500、10000のダメージを受けてもらうぜ」

「あ、やだ……やだ……」

潮の嗜虐的な笑みでの言葉に彩葉はぶるぶると震え出すが、もうその処理は止まらな

い。

「ヒヤツハハハハアツ!!」 LP11500↓5000

「きやあああああああつ!!」 LP5000↓0

二人を強欲の報いたる電撃が襲い、潮はこれで大金がゲットできる未来を夢見て笑いながら電撃を受け、逆に彩葉は大ダメージとなる電撃に苦しみの悲鳴を上げて悶えていた。

そしてダメージ合計11500が強欲な壺のメーターに加算。潮のメーターが「34000」を指してグリードデュエルは終了を迎えるのだった。

「グリードデュエル終了!!!」 最終結果はヘルキャット彩葉1700、ブラッドブル潮は34000。圧倒的大差! さらにブラッドブル潮は未だ立っているのに対し、ヘルキャット彩葉は失神! まさしくブラッドブル潮の完全勝利!!」

司会の言葉通り、潮は息こそ乱れているものの大金入手という欲望が彼を覚醒させているのか未だに意識があるのに対し、彩葉は白目を剥いて舌を出し気絶。しかも電撃の余韻が残っているのか身体をビクビクと痙攣させていた。

「ウオオオオオオオオツ!!!」 これで金は俺のもんだあああああああつ!!!」

そして潮はガッツポーズを取って雄叫びを上げる。その姿を観客達は面白い見世物を見るかのように眺めていた。

「さあブラッドブル！ 君が得たマネーポイントを受け取るといい！ このマネーポイントの支払いが終われば賞金は君のものだ！」

「おう!!」

司会の言葉を受け、潮が得意満面に頷くと同時に潮と彩葉、両方の部屋の真上に待機していた強欲な壺が傾き始め、デュエル開始前のデモンストレーションと同じように裏返って部屋の天井を完全に塞ぐような形でくつつくと共に壺の中からソリッドビジョンの金貨が部屋の中へと降り始める。

「ヒヤツハハハハアツ!! 金だ金だあ!! 全部俺のもんだあああああああつ!!!」

ソリッドビジョンとはいえ金貨。この後には本物の金が入ると信じている潮は満面の笑みを浮かべて天井を見上げ、その金貨を迎え入れるように両手を掲げ伸ばしていた。

「きゃっは♡」

そんな笑い声が聞こえる。

潮がなんだと声の方を向く。そこにはさつきまで無様に倒れていたはずの彩葉が、彼を見下すような目を向けて嘲笑う笑みを浮かべている姿があった。

「ハハハ！ なんだヘルキャット!? 今更負け惜しみかあ!! まあいい、デューエル中の言葉忘れちゃいねえだろうな? お前はもう俺の奴隷同然だ! この金の受け取りが終わった後、たっぷり可愛がってやるよ!」

「きやつつつつは♡ おじさんつてば、まあ気づいてないんだあ♡」

潮の言葉を彩葉は嘲笑う。潮が「アアン?」と凄んだような声を出すと、彩葉は恭しくお辞儀を行った。

「では、短い間ですがご主人様に、奴隷として懇切丁寧にお教えいたします。デモンストレーションの事は覚えておいででしょうか?」

「ああん? あんな金が手に入る手順を見せるだけのがどうだつてんだ?」

「んふふ♪ あの時、マネーポイントを示す1000のメーターが0になるまで、およそ20秒ほどかかっておりました。つまり約1秒でポイントは5減ります。ご主人様のポイントはおいくらでしたでしょうか?」

「34000……」

「これが1秒で5減ると仮定すればかかる時間はおおよそ6800秒となります。これを分に直せば $6800 \div 60$ で約113分。支払いが終了するまでおおよそ二時間となります」

ちなみに彩葉のマネーポイントは1700。支払い終了までは約六分である。

「ふん。たった二時間で一千七百万が入るって事だろ。しかもお前という奴隷も手に入るなら安いもんだ」

「きやはははは♡ ここを生きて出られるって思ってるの？ ご主人様つてばおバカさんだねえ♡」

「なんだと!?! テメエここを出たら覚えてろ!!」

「クスッ♪」

潮の怒号もどこ吹く風、先ほどまで怯えた様子が嘘のような慇懃無礼な彩葉の姿に観客が何故かニヤついていた。

「このグリードデュエル用に作られたっていうデュエル場、何かおかしいと思わない?」「何かだと?」

「なんでいつもみたいな牢屋を使わないのか? なんで二人が別々の部屋に入れられるのか? なんで外の声及び私達の声はマイクやスピーカーを通していいのか?」

彩葉は「んふ♪」と笑って、己の出した疑問に答える。

「この部屋、完璧に密閉されてるんだよ」

「密閉だと?」

「あ、密閉されたの間違いかな? さつきまで天井に空気穴あったもん」

「さつきまで……!?!」

彩葉の言葉に潮は見上げる。さつきまでは空気穴があった。しかしその空気穴は現在、強欲な壺によって塞がれている。

「完璧に密閉された、つまり空気の出入りが無い部屋の中。おじさんはそこで二時間待たせておいて、酸素が持つといいねえ♡」

そう言い、彩葉はにんまりと可愛らしく笑ってみせる。

「本日のホントのメインイベント、開始だよ♡」

そして、その可愛らしい微笑みが見下すような視線と嘲るような笑みへと変化した彩葉が告げる。

「ふざけんなああああああああつ!!!」

それと潮が怒りに顔を真っ赤にしながらガラス部屋に殴りかかるのは同時だった。

「出しやがれ!!! 俺は勝ったんだ!!! 今すぐに支払いを終わらせろ!!!」

顔を真っ赤にして声を荒げて喚き散らし、ガラス部屋を殴り続ける潮。その姿を観客は楽しそうに笑って見守り、人によつては悠々と軽食や酒を注文して潮の姿を肴に食事や酒に舌鼓を打ち始めていた。

そんな潮を尻目に、彩葉は六分ほど経ってマネーポイントの支払いが終了。同時に部屋の扉のロックも解除され、彩葉は強欲な壺が外れたことで再び空気穴から酸素が部屋の中に供給されるように風が吹き出したのを感じつつひよいと部屋を抜け出すと、自分

を応援したり心配してくれたファンに向けて笑顔で手を振りつつ、未だに喚いて拳が破れ血を流しつつもガラス部屋を殴り続ける潮を見てクスツと冷たく笑う。

「おじさんもバカだなあ♪ あんなに暴れて息を切らしちゃつたら、酸欠がもつと早くなるだけなの♡」

そしてそう言い残して舞台裏に引つ込んだ彩葉を迎えるのは猿山だった。

「ご苦労様です。とても面白いショーになりましたよ」

「おじさん、大まかなルールや潮のおじさんをどうするかはともかく、下手したら私まで酸欠になるのは聞いてなかったよ？」

「おや、これは失礼を。貴女の衝撃増幅装置の電流を弱めるようスタッフに念押しするのに夢中で伝え忘れておりました」

猿山の薄い笑み。しかしどうせ実際のところは「そうした方が面白いかもしれない」とても思ったところだろうな。とか「私が酸欠で死んだら物好きにでも死体を売り飛ばすつもりだったな」とか猿山の思考を推測する。

ちなみに猿山の言う通り、今回のグリードデュエルは本来潮への制裁であり欲をかいだ彼が自爆して大金が入手できるという夢をギリギリで打ち砕かれた挙句、自業自得で死亡するというショーを観客に見せるためのもの。

彩葉が巻き込みで死ぬのはまあそれはそれとしても普段使ってるような電流で死亡

するのは面白くないとして、彼女の衝撃増幅装置の電流はギリギリまで弱められていたのだ。その分の苦しむ姿は彩葉が自分で演技していたわけである。

「で、八十五万円はちゃんと貰えるんだよね？」

「もちろんです。後でご用意いたしましょう」

一応ファイトマネー代わりであるお金が手に入るかの念押しに猿山はクツクツと笑って答える。

「ああそれと、カイザー亮にマッドドッグ犬飼が敗れましたね。大ダメージを負ってしばらく再起不能です。その分の地下デュエルのオフアアが貴女に届くかもしれません。担当外ですが、まあ頑張ってください」

「えー、めんどーだなあ……」

同じマネージャーの下にいる同士である相手がこの暴力的な違法デュエルによってしばらく再起不能になった。それに対する感想を「面倒」で済ませた彩葉は、そこで話を打ち切ると「部屋に戻ってさっさとふかふかのベッドで寝よう」と思っ部屋に戻って行くのだった。